

324  
478

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始



15.7.6



基督教十講

大正  
4. 11. 29  
內交

## 緒言

余は今より三年前、八幡製鐵所の求に應じ、所内有志者の爲めに基督教十講を試みたことがある。當時千葉昌雄兄外二三子が筆記の勞を執られ、その後一年を経て上梓しては如何にやとの一書を添えて原稿は講師の許に送附された。

一日北文館主の訪問に接し談、此講義録に及ぶや、それは屈竟の材料である、訂正増補して出版されねば獨り教外人に斯教の綱領を知らしむるばかりでなく、既に領洗せる教會員の養成用としても、亦志道者の棗としても有益なるべければ原稿を貰ひたいとの事であつた。

是に於て乎原稿の「基督教の現況」之を除き、「神觀」三篇、「基督論」二篇を各一篇に縮め、新たに「更生」「新約書の編纂史」「會衆政治の大精神」の三篇を加へて十講となし、尙ほ其外に「基督教問答」を起草し卷末に附することゝしたのである。「基督教問答」は講者が十數年來傳道先にて接したる質問と之に對する解答

である。此問答は初心者、教外者は勿論基督者の間に起り来る疑問を解かんと欲する衷情より執筆したものなれば、聊かにても懷疑者に光明を與ふることを得ば講者に取りては満足の至りである。

大正四年十一月六日

東都に於て

# 基督教十講目次

第一講	基督教渡來史	一
第二講	神觀	一五
第三講	基督觀	四八
第四講	人生觀	七四
第五講	基督の救ひ	九五
第六講	祈禱論	一〇九
第七講	更生論	一二三
第八講	信德並行	一三一
第九講	新約書の編纂史	一四一
第十講	會衆政治の大精神	一五六

附 録

基督教問答

第一講問答	一
第二講問答	四
第三講問答	六
第四講問答	八
第五講問答	一三
第六講問答	一五
第七講問答	一八
第八講問答	二一
第九講問答	二二
第十講問答	二四

基督教問答追加

一 宣教師	二五
二 現 況	二八
三 待 遇	三二
四 冠婚葬祭	三四
五 神佛儒	三七
六 他力門	四〇
七 洗 禮	四二
八 東洋西洋の差	四五
九 分 布	五〇
十 其他の諸問答	五五

基督教十講

宮川 經輝 述



第一講 基督教渡來史

今晚から五日間基督教に關して十回の講話を試みることは私の光榮とし、且つ悦びとする所である。

我日本に基督教が初めて渡つて來たのは足利氏の末葉であつて、當時ポロポロ教と唱へて居たと云ふが、其意味は解らない。又大永三年後柏原天皇の御宇西暦一千五百二十三年阿波の國の人で、里見勘四郎といふがあつて、フキリビン島に漂着して其處で初めて基督教を學んだと云ふことであるが、これも其後如何になつたか不明である。以上の二つ即ち足利時代の末葉に傳來したポロポ

口教と、里見勘四郎がフキリピンで斯教を學んだといふことは事實ではあらうが、何等後日に残つたものがないので考へやうがない。只基督教渡來の順序を知る上に於て、一應其の事柄だけは御耳に入れて置く。

眞實に基督教の宣教師が傳道の目的を以て渡來したのは天文十八年で、丁度今より三百六十餘年前のことである。史によれば、當時歐洲ではウキクリフといふ人が英國に起つて新教を主張し、随つて天主教を排斥することになつた爲めに、自然天主教は方向を轉じて東方に傳はることになつた。元と軍人で戰爭の爲め手傷を負ふて入院中、基督教の書籍を讀み大に感奮し、起つてベジユイツト派を開いたイグネーシヨス、ロヨラの弟子でフランシス、ザビエーと云ふ人が印度のゴアで此の教を傳へて居つた、そこにアンデローといふ日本人が漂着して此の教を信奉することゝなつた。ザビエーは東方に日本國あることを知り、其處に斯教を傳へて見たいと云ふ祈願を起し、其のアンデローを案内者として來朝することゝなつた。此一行は初め薩摩に上陸したが、薩摩では受け付けな

かつたので、轉じて豊後に入り、國主大友宗麟の歓迎する所となり、茲に傳道の端緒を得たが、更に轉じて山口に布教を始めた。

太政官に於て出版された日本西教史には宗論の事が記してある、これは事實ではあるまいが、幾らか當時の事情が想察されるので、其大要を話して見よう。

大分の近傍に盛大な寺院があつて、茲にフカラ殿といふ高僧があつた、師は耶蘇教が侵入しては堪らじと非常に激昂して見たが、何分にも國主大友氏が其傳道を允許し、且つ自身にも信仰して居らるゝので、いくら騒いで見たところが仕方がないので、立會宗論を致さうといふことになつた。扱て僧侶方は大勢であるのに、ザビエーは唯一人である所から、先づ宗論の規定を設くる必要があるといふので、左の如く規定した。

- 一、萬事靜肅を旨とする事
- 二、審判官を立て、議論を規定し、双方一定の出席者を定むる事
- 三、宗論は二三僧侶に限り、他出席者は靜かに傍聽する事

四、若しフカラ殿敗をとらるゝときは日本人が眞の神、西教を信する事に對しては決して嘴を入れざること

といふのであつたが、議論の席にはフカラ殿側からは四人出席した。そして其方から先に議論を開始し、曰く「耶蘇は神國たる日本の建國に適合しない。」曰く「日本では蓄妾は公許である、然るに耶蘇は夫れを禁すると云ふが、我其理由を見出すに苦しむ。」と云ふが如き詰らない議論であるので、ザビエーはかゝる問題に耳を假さず、直に斯教の中心問題たる神の有無に關し、一意匠論二、天文学上より立論したが、殊に當時の邦人多くは天文の何物たるを知らないやうな次第であつたので、ザビエーは得たり賢くして雄辯滔々と論じ立てたさうである。

次に解剖學上より立論してどうしても此の世の中には神がなくてはならぬいと主張し、左の巧妙な例を引かれた。畫家に人間の顔を書かせると二十位は異つた顔を書き得るが夫れ以上は不可能である、何度書いても同じ様なものばかり出来るが、世界の人間はどうかといふと何億何萬といふ人間の凡てが其顔

が異つて居て一として同一のものはない。眉目鼻口といふやうな僅三四種類のものゝ配合に成れる顔が皆悉くちがつて出来てゐるといふは到底神でなくては成し難いことであると云ふ證據論に至つてフカラ殿も神の在ることを否定し得なくなつたさうである。

かくてザビエーは豊後を引揚げて山口に移り。そこでは又非常に議論があつたが、時間が少いから委しく紹介するわけにはいかない。然し茲に述べねばならぬ一事がある。それはホルマンデスといふ宣教師が毎日大道に立つて説教をして居つたが別に傾聴するものはなかつた、三十日目に聽衆の中から一人の惡戯をするものが出て、説教してゐるホルマンデスの顔に青睖を吐きかけた。傍聽者は彼が怒るであらうと其様子を窺つて居た、所がホルマンデスは平然として夫れを拭ひ落して尙ほ熱心に話を續けたので一同非常に感心して多數の信者が出来たと云ふことである。これより先きザビエー謂へらく日本に道を傳ふるにはどうしても上京して將軍に傳道するに如かずと、直ちに同師は



山口を引揚げて泉州堺に往き、信長に拜謁して基督教を説いた。公は基督教は眞に優秀な宗教と考へられたものと見え、京都にて四町四面の土地を供給し、茲に大教會堂を建築することとなつた。これがかの南蠻寺である。ところが此の基督教は單に宗教を説くのみならず、病人があれば醫藥を與へて之を醫し、負傷者があれば親切に手當をしてやるので、信長の心中多少疑ひの雲が懸つた。その次第は宗教の本領として道を説くは當然なれども、藥を與へたり手當をしたるするの理解が出来ない、これは何ても人心を收攬して一仕事しやうといふ野心を抱いて居るのではあるまいかと案せられ、密かに人を派して調査させることとなつたが、別段怪しむべき點は見出されなかつた。今日のように醫術が進歩して居れば、何も牧師などが藥を與へる必要もないが、此の時分は未だ醫術が進歩して居なかつたので、基督教の勝れたる智慧によりて藥餌を作り與へたものと見ゆる。その後安土の城にて信長公の面前で佛教と基督教との討論をさすといふことになつた。

佛教の方では評議の結果永觀堂の眞海和尚等が出席し、天主教の方では南蠻寺のフルコン唯一人出ることになつた。今度こそは佛教が勝つか基督教が勝つか此處が關が原といふ有様であつた。ところが幸か不幸か松永久秀等の亂が起り、使者の注進櫛の齒を引くが如くであつたので、この宗論は中止となつたと録してある。一寸茲に一言したいのは、今日私共の信する基督教は新教であつて、今述べた所の基督教は天主教であるから、同じ基督教でも多少異つて居ることは御承知を願ひたい。

基督教は斯の如くして我邦に傳はつたのであるが、當時日本の宗教界は如何であつたかといふに、神道は伊勢の大神宮や出雲の大社を初め、至る處大小の神々を祭る位に過ぎなかつた。蓋し本居宣長や平田篤胤等のやうな學者が世に出る二百年も以前の事であるからして、これぞといふ人物もなかつたものと見え、基督教渡來の時には神道側では一人の反對者も現はれなかつたやうである。儒教の方では藤原惺窩、林羅山などいふ學者の輩出する以前の事であるから、是

亦基督教に反對する丈けの力ある人物なく唯佛教丈けが反對を試みた。尤も佛教といふ中でも法華經の僧侶が急先鋒となつて反對したのであつた。是れで見ると當時佛教でも法華經が一番勢力があつたやうに思はれる。茲に惜むべき一事は前述べたフランシス・ザビエーが日本に逗留せし間は僅々一ケ年餘であつて、去つて支那の方面に出かけたのであつたが、彼はどこかの島で病歿してしまつた。ザビエー傳道の結果はどうであつたかと云ふに左記の人々が信者又は志道者中に數へられてあるのを見れば驚くべき長足の進歩をしたやうである。試みに其名前を舉れば三好長慶、松永久秀、長岡越前、津田美作、岡野越後守、長岡藤孝、高山友熙、同友祥、宇喜田秀家、小西攝津守行長、有馬晴信、大友宗麟、黒田如水等である。

然るに天正十四年に至つて太閤秀吉は突然耶蘇教の傳道は一切禁止するとの宣言を發布されたがそれについて面白い話がある。

嘗て秀吉が京都に在りしとき一日途上一美婦人を見て心動き之を館に引入

れて妾侍せしめんとした。處が其の娘は斷然館入を拒み、いかに論しても頑として應じない、太閤の命であらうが誰の命であらうが人の妾となつて節操を賣るが如きことは斷じて爲ないと云ふ。太閤は今か／＼と待つて居られたが待てども／＼來ないので非常に立腹され、今の時に當り太閤の命を聞かぬとは不埒である、命知らずである、と怒鳴らるゝ處に斡旋を命せられた人は歸り來り、あれは耶蘇教信者でありますからいけませぬ、天帝から稟けた身體なれば人の妾となつて節操を汚すやうなことは致しませぬと申して、どうしても應ずる氣色がありませぬと復命したと録してある。太閤は勿論かゝる痴情の爲に耶蘇教禁制を取てしたわけではなかつたらうが、それには他に政事上の理由がある。その頃南蠻の船が土佐沖で難船したと云ふので、秀吉の家來が船檢分に出張して一枚の地圖を見出した。夫れを見ると日本は羅馬法皇の領分に入れられてあつたので、非常に驚いて愈々耶蘇教を手先きにつかひ日本を取りに來るに相違ないと云ふので、終に上述の如く禁令を布いたといふとである。然し今から

考へれば其想像は全くの誤解である。思ふに當時歐羅巴では新教が破竹の勢で英蘇、獨逸、荷蘭方面を風靡し、舊教即ち天主教は僅に歐洲の南部即ち伊太利、佛蘭西、西班牙等を保つに過ぎなかつたので、其勢力を東洋に伸さんと欲し我邦を傳道區域に入れたものと見ゆる、此地圖は單に其勢力範圍を示したまて、何も國を取るの奪ふのといふ下心があるのではなかつた。秀吉の耶蘇教禁制は國家的方針を立てたまでのことで、實際は默許の姿であつた。秀吉がこの禁止令を布いた當時の教勢はどうであつたかと云ふに、教會四十二講義所數ヶ所、教徒の總數十五萬人、表面四十萬人と號して居つた。

嘗て織田信長が諸大名を引見されたとき、諸氏の臣下には大分耶蘇教信者の武士ありと聞くが、其の者共の性質は善いか悪いかどうであるか、善惡優劣とも忌憚なく述べられよとの台命があつたので、甲は進み出て、私は未だ審には存知ませぬが、耶蘇教信徒が多少あります。此の者共は他の臣下に比し忠勤を抽んで、平常決して人の害をなさず専ら善を爲す者でござりますと云へば、乙丙之

に和して同感でござりますと申出したさうである。其後、世は徳川氏の世となり二代將軍秀忠公は其の臣下を羅馬に遣はして深く宗教事情を探らせた結果、基督教は信せぬ方がよからうといふことになつたので、一千六百十三年に禁令を發布することとなり、三代將軍家光公の世に至り島原の亂があつて耶蘇教は全然我邦から一掃さるゝこととなつた。

爾後二百年を経て再び耶蘇教が渡つて來たのが安政六年であつた、米國からゼリキンス、ウキリヤム、ヘボン、フルベツキ諸子が來朝せられたのである。ウキリアム氏は後監督に擧げられ非常な徳行家で同人間には聖人として尊敬され、ヘボン氏は英和字典を作つた人で我國の英語傳播は勿論、文明の發達に貢献した人である。フルベツキ氏は時の政府に小學校設置の建白をなし、且つ之が爲に非常に盡力された人である。再來の耶蘇教は天主教ではなく新教であつた。そして其布教上の勢力の中心點となつたのは北は札幌、中は横濱、南は熊本の三ヶ所であつた。之に付て種々面白い史料がある、北海道長官黒田清隆氏は農學

校を起すに就て米國からクラークと云ふ教師を招聘された。夫れが耶蘇教の熱心家であつて、聖書を修身科に入れることを建議した。黒田氏はそれは大變だと云つて拒まれたところが、若し此の建議が容れられないならば、職を辭して歸米するといつて歸國の仕度に取り懸つたので、氏も折角連れて來たからには、今歸國せしむるのも甚だ残念だといふので、とうとう聖書を以て修身の基礎とすることを承認された。此の人は僅か一年間餘札幌に教鞭を取られたが、人物が善くて熱心家であつたので、其成績頗る良好で、其の門下には内村鑑三、新渡戸稻造、宮部金吾などの名士が輩出した。今一人は宣教師でエス、アール、ブラオンといふ人である。師は横濱に數年間居られたが、其の門下には押川方義、植村正久、本多庸一といふ知名の士が出て居る。次は熊本で、明治四年に藩主細川侯が陸軍學校を建つる目的でフルベツキ氏に依頼して、ゼンスといふ軍人を招かれたが、氏は藩に於て陸軍學校を興す必要はないと主張し、藩主に勸めて普通學校を興し第一期生として五十名、第二期生七十二名を募集することとなつた。私は第

二期生として四年間先生の薰陶を受けた。私が二年生の頃生徒の中で三人程潜に先生の宅に耶蘇教を聴きに行く者があつた。さあ大變だ。苟も日本に生れて耶蘇教を聴くとは實に怪しからぬ奴だと、私共はわい／＼騒ぎ出した。然し考へて見ると基督教は早晚我邦にひろまるに違ひない。到底防ぎ得べきものでないといふ所から、自分は一つ耶蘇の穴探しをする積りで、以て、先の三人の仲間入りをして、斯教を聴くことになつた。扱て親しく接して見るとゼンス師は實に偉大にして賢明な人物であつたので、先づ其の人物に感じてしまつた。師の言に諸君が人格を磨かんとするならば聖書の中の馬太傳の五章六章七章即ち山上の説教を讀むべし、之が修身の基である、之を能く修得したならば人格の發達期して待つべきである。之を耳にした青年の一團は山上の垂訓を修徳の槩と心得、大に鍛練に努めたのである。明治九年の一月三十日を期し、四十人の學生は市の西南に屹立せる花岡山に會合して天拜會なる者を開き、西洋文明の源たる耶蘇教を一日も早く我國に傳ふべきを誓ひ、之が爲めには死尙ほ

辭さないと云ふ覺悟を定めた。以上の三ヶ所に於て養成された青年輩は期せずして宗教運動を開始したので、佛教側では京都の西本願寺が中堅となつて耶蘇退治を始めた。基督教も明治十八年頃迄は一向振はなかつたが、禍ま時の大臣井上馨氏と福澤諭吉先生とが條約改正の事から歐化主義の鼓吹に努られたお蔭で、斯教に歸依する者が續々起つて非常な勢を呈したが、二十三年頃から又保守反動の氣勢の爲めに一頓挫を來たし、二十七八年頃は沈衰の極に達して居つた所が日清戦争後再び發達隆興の盛況を呈し、今日は各教會各派相競ふて傳道に努めて居る。

## 第二講 神觀

今晚は初めに神觀の一を述べ、次に神觀の二を續ひて御話する積りである。初めの方は少し六ヶ敷くなるかも知れないが、後の方は段々と分り易くなるかと思ふ。

今を去ること凡そ二千四百年以前、希臘の國にプラトーンと云へる哲學者があつた。此の人は後にも前にも比類なき哲學者で、或人はこんなことを云つて居る、プラトーン以來此世に幾百の哲學者が生れたがプラトーンの前にプラトーンなく、プラトーンの後にはプラトーンなく、つまりプラトーンに比すべき唱道者はないと、その哲學者プラトーンは此天地宇宙の間に神の存在することを稱道して居る。然のみならず、彼れ以前の哲學者も以後の哲學者も皆等しく神の存在を云爲せぬものはないのである。

然らばどんな風に之を解釋して居るかと云ふに、先づ此天地宇宙の間には何

にか精神的のものゝ存在して居ることを主張する。例へばプラトーンは我等が眼に見ゆる處のものを一の影象と云ひ、其影象の世界の後に眼に見えざる一の理想の世界があつて、それが眼に見ゆる影象世界の源であつて、その影象はその源から流れ出たものであると。つまり、影のある處には其影を寫す光があるので、煙のある處に必ず火があると云ふやうな理窟であつて、その影の世界は未だ光の世界は根源である。プラトーンと相前後してアリストテレスと云ふ學者が出たが、彼れは哲學は勿論のこと、倫理學でも數學でも論理學でも科學でもありとあらゆる學問に長じた人であつたが、彼れは天地宇宙がこんな風に成つてあるのは、其源にエノルガヤと云ふものがあるからだといつて居る。此のエノルガヤと云ふのは希臘語であつて、精力の意である、つまり此宇宙にエノルガヤあつて天地萬物が出来たと云ふのである。

話は少し時代を飛び離れるが、次に御紹介したいのはデカルトである。デカルトは佛國の哲學者であつて、之は近世哲學者の鼻祖と稱する程の大學者であ

る。此人は妙な人で、何にも彼も疑ふて見た。神も疑ひ、人も疑ひ、宇宙をも世界をも疑つた。見るもの聞くもの悉く疑ふて見たのである。疑ふて見れば目に見へるものはなくなり、耳に聞くものもなくなり、天地も宇宙もなくなり、何も彼もなくなるやうになるのである。處が段々疑が深くなつて、自分までも疑ふて見たが、彼れは疑ふて居る自分だけは残つた様に思つたのである。即ち疑ふて居る自分はないのである乎、疑へば外のものはないが、疑ふ自分はあるてはない乎、外物は凡てなくなつても自分の心丈はなくならぬやうである。若し疑ふ自分の心がなかつたならばかうして疑ふことが出来まい。疑ふ心があるから疑はれるので、此疑ふ心がなければ疑はれない。こゝから彼の有名なデカルト哲學否な近世哲學が啓發されることとなつた。即ち『吾思ふ故に吾あり』といふ思想が出来上つたのである。我思ふ、その思は我の影である、我は思の主であり、源である。併し其活動に依て我の存在を確むるので、一體思と云ふものは不思議なもので、私が今此演壇に立つて居りながら、瞬間に東京のとをすぐ思ふ

ことが出来る、その速なると、小倉から門司、馬關、岡山、神戸、東京、又またしく間に東京を通り越して横濱から船に乗つて米國にも行き、歐洲をも一巡することが出来る。其速いと兎ても何物も及ばぬ程である。唯速い許りでなく甚だ自由なもの、すぐに變化するものが出来る。この思は他の思に移るに、時間の苦痛が伴はないので、極めて自由自在な者である。然し乍ら時々空想に終るとがある。又之を實現せしむるには困難を感ずる。そこで眞實は人間の思には制限のあることを知らねばならぬ。併し其限のある處から多々限りのない處を考ふるとが大切で、有限なる宇宙の後、隠れたる所に無限の者がある。有限は無限の影で、無限の何物かあるから此有限の者があるのである。つまり我は思想の源で、我が思は我れの現れてあるが、我は矢張り有限である。此有限の我の後に、見えない處に無限の存在者がある。之が即ち神である。デカルトは明かに之を神とは云ふて居ないけれども、デカルトの意は之を神とするのであらうと思ふ。次にスピノザを紹介して見やう。彼は佛蘭西に生れ、硝子磨きを職業とした

處のユダヤ人である。併し非常な學者であつた。その哲學の中にこんな思想がある。此天地宇宙は吾人の眼に見へて居るが、實は眼に見へざる處に其の本源がある。彼れは之を稱して實體と云ふ。其實體が即ち人間の思想の根本であるといつて居る。

獨逸に名高いカントと云ふ哲學者が出現したが、其身の丈は僅に五尺二寸と云ふ西洋にては極めて小男である。西洋で小男と云ふ許りでなく、日本にては五尺二寸位では大男とはいへない小男の部である。體はこんな小さい人であつたが、哲學者としては實に偉大な者で、プラトーン以來の大哲學者と云はれた人である。少し岐路に入る様であるが、カントの平生の生活の有様を紹介して見やう。カントは至極規帳面な人で、朝何時に起きて書を読む、其次は研究する、其次は一寸散歩する、其次は客に接する、又出掛ける、又讀む、夜になれば又散歩すると云ふ様な風であつた。カントが三時半頃に散歩するとなどは誰も知つて居る時刻であつて、ツツカリして何時頃だらうと思ふ時分にカントが散歩して

居る。アーモ―三時半だナ―と誰でも合點するのであつた。一生涯をケーニグスベルヒと云ふ所に過した人で、遠方や他國に行つたたのない人であつた。

此人が哲學書を著はして居るが、一は純理批判と云ひ、理性を土臺として現象の世界を論じたもので、我等人類に了解せられ得るものは現象世界である。然しながら了解するとの出来ないものがある、それは非有の世界である。目に見耳に聞き、理性に了解せらるゝものは現象の世界で、目に見へない非有の世界は了解せられないが、了解せられないから、ないものだと言ふとは出来ぬ、神の如きは夫れである。純理批判の方で解らないものが、實際批判の方で解ると云ふは如何なる理由であるかと云ふに、それは人間の能が之をつかまへるのであると云ふて居る。目に見るのではない、耳に聞くのでもない、心に考へるのでない、何となく之をつかまへるので。人間の能でつかまへると云ふは即ち直覺すると云ふのだ。そこで直覺すると云ふことは如何な風に解釋するかと云ふに、例へば茲に人を見ると云ふ場合に於て先づ其人を見るのである。夫れから履

歴書を見る。それから戸籍の謄本を見る。夫れから保證人の書いたものを見る。處が何も彼も立派である。履歴書も立派である、戸籍の謄本も立派である、保證人も立派である、併しこれらのものが皆悉く立派であつても今一つある、即ち其人物を見る時に自分の心に之は立派な人であるなど云ふ様な氣が起る、氣乗りがする。其氣乗りがするのが所謂直覺である。其直覺で此人は立派な人だとせねばならぬ様になる。其氣乗のする所を履歴書や、戸籍謄本や保證人の爲めに益々立派ならしむるのである。そこで之を人の力でつかまへると云ふのである。併し單に直覺に映じたからと云ふて、それで直に實際であるとは云へない。之には往々間違が伴ふ、直覺で氣乗がしてそれを考へて批判する、即ち純理批判に訴へるのである。けれども單に純理のみでは眞の人は了解することは出来ぬ。神も同じ様である。純理のみで神はつかまへられない實際批判でつかまへるのである。カントが此の直覺説を立て、最早二百年、吾人は實際に由つてその眞價を認めて居ることである。



次にヘーゲルの哲學を簡単に紹介しやう。ヘーゲルの哲學は非常に六ヶ敷いもので、誰れにも分らない。自分のわかつて居ない事を紹介するのであるから諸君に御解りにならうとは思はない。實はヘーゲル自身にも解つて居ないと云ふことである。自分でさへ解らぬ哲學であるから、其著書を読むに解らぬとは却て不思議と云はねばならぬ。或人がヘーゲルに向つて、君は偉らい哲學を發明したものだ。自分等は君の哲學は一寸も解らぬといふとヘーゲルは之に答へて自分の弟子にたつた一人自分の哲學を了解し得るものがあるが實は彼も十分には解つて居ないやうであると。倍てそれは如何なるものかといふに、先づヘーゲルは此天地を考ふる前にイデヤを考へたのである。其イデヤがあつて始めて天地がある。イデヤは實に大きいもので、神も其イデヤの中にあり、宇宙も其中に在り、人間も無論其中にあるといふのである。能く解らないが、兎も角も此六ヶ敷い哲學の中に神の存在すること丈は云ふてある。

次に英國の學者のことを申し上げたい。一體英國には實は紹介する程の學者は

居ないのである。居た所で取り止めていふ程のとはないのである。就中ダーウキンが進化論を唱ふる様になつてからと云ふものは、神もなければ佛もないと云ひ、人に靈魂の存在すると云ふとの如きも疑はしい。唯存在するものは物質のみであると云ふ議論が英國一般に行はれたのである。我が日本に於ても此種の議論が随分盛に行はれた。例へば我國にて佛蘭西學者の隨一とも稱せられた中江篤介氏の如きは、無神無靈魂など云ふ説を唱へたが、之は唯物思想である。けれ共昔の學者の中にはプラトーン初め斯る亂暴な學説はなかつた。前にも既に紹介した様に、プラトーンのエノルガヤやスピノザの實體、デカルトの無限、カントの非有と云ふが如きは、全く一の存在者で、即ち神ありと云ふ思想である。處が十九世紀の前半頃から後半の終頃までは唯物論が盛に行はれ、單に天地宇宙のと皆悉く物質のみを以て説明する様になり、遂には無神無靈魂の説となり、痛く人心を亂したのである。處が此頃になつて學者の中に唯物論を以て満足せない者が出て來て、再び精神界の活動を見る様になつたのである。

例へばオイケンの如き學者が出たことである。オイケン<sup>1</sup>は獨逸の學者であるが、既に六十三四歳の人であつて、その云ふ所に依れば神と人との關係は人間と空氣との關係の様な者である。即ち人間は空氣に取り圍まれて居る。空氣は人の外にある許りでなく、鼻を通つて肺の中まで充ち満ちてある。肺の中の空氣は肺の中のみ閉ぢ込められて居たくなく、肺の中から外の空氣に通ひたいと見える。中からも外からも此の空氣は互に相往來し互に通ひたいのである。又通はずには措かないので實際通ふて居るのである。之と同じ様に人間に一の靈魂がある、其靈魂は獨り人間中に閉ぢ籠つて満足するものではなく、天地宇宙の大靈と通ふのである。宇宙の大靈もまた人間の靈魂と互に通ひたいのである。否實際に通ふて居る。而して人間相互の間にも此の靈魂は通ひ、天地宇宙にも通ひ、常に活動して居るのである。之れがオイケンの考て靈の生命とも云ふのである。次に又佛國の哲學者でベルグソンと云ふ人があるが、此人の學説を一寸紹介して見たい。此人は創造的進化と云ふ事を考へて居るの

て、彼れの云ふ所に依れば此世界は晝となく夜となく變化するのである。變化とは新になる<sup>2</sup>と云ふことである。如何して此の世界が日々新になるのであるかと云ふに此天地には一の實在がある。其實在が凡ての物の中に這入つて來るのである。そうすると其物が新しくなる。自分の中に此實在が飛込んで來る。之が自分の意識となるので、自分が新しくなるのは、其實在の飛込んだ爲めである。つまり處人間の意識の外に超意識と稱する者があつて、凡てのものを新しく變化せしむると云ふのである。之が矢張り神と云ふ事になるであらふ。終りに今一人紹介したい。即ちオックスフォード大學のゼームス、ワルド氏である。此の人の考に依れば我々人間は此天地宇宙の一部分で、天地宇宙もまた吾々人間と同じ様に大なる全體の一部分である。自分と天地宇宙が聯らなつて居る許りでなく、其全體とも互に相聯らなつて居るのである。例へば馬關海峡に依りて日本海の水と瀬戸内海の水と相連なつて居る様なものである。瀬戸内海の水は其一部分であり、また日本海の水も其の一部分である、而して此

部分が馬關海峡に依りて互に相連なつて居るのである。然かも此兩部分が太平洋と云ふ大なる全體の海に連なつて居る。斯の如く吾々は人間として互に其一部分であるが又天地宇宙も吾々と同じ様に何ものかの一部分である。而して此の部分／＼が互に相結ぶ許りてなく、何ものかと云ふ全體に連なつて居る。之を神と云ふのである。つまり處人間は神の一部分にして神と連絡して居ると云ふ様なものである。

西洋のことはこれ位にして措いて、東洋のことを少しく述べて見度いと思ふ。そこで先づ印度の事から初めやう。印度には上古から哲學が發達したものであるが、彼等の間にウパニシャッドと稱する書物がある。之は誠に深遠な思想を現はしたもので、此書の中に大梵天と云ふ神がある。此神は其高さに於ても其の廣さに於ても其深さに於ても測り知ることの出来ない誠に大きい神である。又遠方にあるのでどこから云ふても人間とは關係が薄い。云はゞ手の届かぬと云ふ様な、及びも付かぬ神である。處が今一つの神がある。それはアト

マンといふ神である。此アトマンといふのは人間自身の中にあるものである。そこで人間が此二つの神に對して一方は餘りに遠方で高く深く廣く拜んでも全くの處無關係となるので、在ても無くても別に交渉はない様になり、また一方は自分の中にあるので自分が其神を拜まんとする時には双手を合せて自分で自分を拜むと云ふことになるので、實際に於てはかくの如き神の存在は宗教の要素とはならないのである。

次に支那の事であるが、支那には御存知の通り、皇天上帝と云ふ言葉がある。其皇上帝は如何なるものであるかと云ふに、少し明瞭を缺く處はあるが、善人に福し、惡人に禍するものであると考へられたのである。善に福し、惡に禍すと云へば人間の様なもので心のあるものなることは解る。併しながら西洋の哲學者の如く此皇上帝の内容を研究したものはない様である。

外國のことは此の位にして、日本のことを申して見たい。我國の學者の中に神の存在を云爲したものは澤山にある。併しながら藤原惺窩、林羅山、室鳩巢の

如き學者は單に五常を説き、孔子の所謂未だ生を知らず、焉ぞ死を知らんとか、子は怪力亂神を語らずと云ふ方針を取つたので、宗教上には取り立て、云ふ程の人はなかつたのである。處が今から二百年計り前に近江の國に近江聖人と稱へられた中江藤樹先生が出られた。此人は朝起きて顔を洗ひ口を嗽ぐと、衣物を更めて一室に這入り太乙神經を讀んで天を拜したと云ふことであるが、太乙神經の序文を見るに實に左の如く書いてある。

太一尊神、書所謂皇上帝也。夫皇上帝者。太一之神靈、天地萬物之君親、而六合微塵、千古瞬息、無所不照臨、蓋天地各秉一德、而不及上帝之備、日月各以時、明而不及上帝之恒、日月晦者明虧、天地終而壽不竟、推之不竟、其起引之不知、其極息之不滅、其機發之不留、其迹無一物不知、無一事不能、其體充塞太虛、而無聲無臭。其妙用流行太虛、而至神至靈、到於無載、入於無破、其尊貴獨而無對、其德妙而不測、其本無名號、聖人強字之號、大上天尊太一神、而使人知其生養之本、而敬以事之。

是は實に偉い思想である。其内容を摘んで云ふならば、神は唯一つの靈であ

り天地萬物の君であり、親である、大きい事も小さい事も支配し、初めから思ひことはない、目の届かない所はない。天地の間には一徳を備へて居るものはあるけれども、神には萬徳が備つてある。日月は時に光るけれども、此の神の光は恒である。日月は晦くなるとがある。神にはそんなことはない。天地は終るところがあるかも知れぬけれども、神には終りが無い。初めもなく終りもなく、其働を妨ぐことも出来ず、其働いた跡を止めない、全智にして全能在さる所なく、しかも聲もなく臭ひもない。其働きは自由自在切ること、出来ねば破ることも出来ない。其尊いことに比較し得るものがない。其徳至れり盡せりと云はねばならぬ。元來名があつたのではないが、物知りどもが強て大上天尊太一神と云ふ字を以て其神を崇めて居るのである。而して其恩恵に由て人間が生きて居るのであるから、之を尊敬信仰して拜んで居るのである。是は實に偉いものであると云はねばならない。西洋では哲學者が神に就て様々に云ふて居るが、日本にては中江藤樹ほど明かに云ふた人はない。先生は基督教をも信仰し

て居られたのである。其時分の學者中には實に珍らしきとてある。先生の云はれた言葉に「佛教も基督教も等しく後生を説くけれども佛者を基督教信者に比すれば基督教信者は現在を重んじ理想を高くして居るから、寧ろ基督教の方が遙かに勝れて居る様に思ふ」と。

而して今引用した太乙神經序と詩篇第百三十九章とを比較するに、大體において似て居る。恰も瓜二つと云ふ可きである。

又中江先生の弟子なる蕃山先生の事を申さう。熊澤先生は岡山の池田侯に仕へた人で、學者であつたが、政治にも土木にも非常な手腕を有せし人物であつた。其の人の壁書と稱するものゝ中に有名なものがある。昔の人は壁書といつて、つまりそれは座右の銘であるが、其壁書に「人の見て悪しとするも天の見て善とするものは我之を行ひ、人見て善とするも天の見て悪しとすることは我斷じて之を爲さず」と。之れは全く藤樹先生の教を受けたもので、神の前には決して惡をせぬと云ふのである。

又西郷南洲は人を對手にせず、天を對手にせよと云はれた。一時賊將などの汚名を受けられしも、其の徳の高き實に此の天を對手にすると云ふ精神の光輝と云はねばならぬ。話は變るが、私の知人の一人が曾て米國で或町の内で獨りの黒奴に靴を磨いて貰ふた。其靴磨きの黒奴が餘り奇麗に磨くので、彼がもうよい、そんなに奇麗に磨いて貰はなくても……直に泥に踏み込むからと云ふたら、其黒奴が云ふに、あなたはそれでもよいかも知れませぬが、私がそれではすみませぬ。それは一體どうした譯かと云ふと、いや私は人の前に靴磨きをして居るのでなく、神様の御目の前にして居るので、其神様の御目に私の仕事の不充分であるとは實に相済みませぬと云ふたそうだ。靴磨きの黒奴でさへ、斯の如き考へを以て仕事をして居る。偕て此神觀の發達に就て一寸述べて見たい。

第一は自然宗教と云ふので多くは野蠻未開の地方に行はれるもので、太陽を拜むとか月を拜むとか、山を拜むとか、或は何にても自然物を拜すると云ふことである。私は強て日本固有の宗教に就て批判をする積りではないが、併し古事

記中の神々に就て一見するに自然宗教の分類に入るのではなからうかと思ふ。例へば天地宇宙の間に先づ天津神と稱する天の御中主の神、高皇產靈神、神皇產靈神の三神は獨り身の神に在りまして隠れ身の神と記してあるから、他の神々とは異ふところがある。併し他の神々と云ふは例へば十柱の神の如きて、豊斟淳神と云ふは水蒸氣の有様

可美葦芽彥舅神は植物發生の有様

其他は略するが、要するに、天地が初めて成れる時の有様である。之を拜むのて自然崇拜と云ふことゝなる。尤も明治天皇の御製中に「眼に見へぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけれ」。又皇太后の「獨りのみおもふ心のよしあしを照しわくらむ天地の神」と云ふ御歌に現れた心は恐れ多いことであるが、天の御中主の神を御歌ひなされし様であるが、宇宙の神を御認めなつてある様に思はれる。併し概して日本固有の宗教は自然崇拜と云ふ方が適當と思ふ。

次に祖先崇拜と云ふとてであるが、西洋でも日本でも自然物を崇拜したる後は、

確かに祖先崇拜になつて居ると思はれる。即ち祖先が自然物を征伐し又有ゆる敵を斃して勝ち得たる功勞と其恩恵とを思ふて祖先の靈を祭るのである。

支那の如きは祖先を崇拜する點に於て餘程發達して居る。記せよ今尙未開野蠻の地方には祖先崇拜は盛に行はれて居ることを。

それから主一神教となる順序だが、之れは祖先中の主なるものを崇拜するのて、多くの自然物及祖先の中より主一の神を選ぶのである。

次に多神教に移り行くが、之れは神らしき觀念に伴ふもので、自然物とか祖先とか云ふものが、其偉大なる力を認められて遂に多神となるのである。

又其次は汎神教であるが、汎神教は萬物、これ神にして、神として獨り特別のものがあるのではない。天地そのもの、即ち偉大なる力とは天地そのものであるとの考へから、此思想が起るのである。それから一神教となる。

所謂一神教とは此天地宇宙の間、獨一絶對の神が存在すると云ふので、以上の他の諸教と全く趣を異にするものとなるのである。一昨年の事であつたが、私

の宅に一人の青年が参つて、「先生私は一の疑問があつてお訪ね致しました。何卒お教へを願ひます。私は友人の一人である牧師の宅に参りまして種々其話を聞くのでありますが、併し其牧師の云はるゝ神と云ふとが解りませぬ。私が解る様に教へて呉れる牧師がない様に思ひます」と、随分生意氣なとを云ふ青年であると思ひつゝ、それなら私がお尋ねするが、君が解らぬ神と云ふは一體どんな神でありますかと云ふと、青年はそれが解つて居ればお尋ねはせぬのであります。私には丸つきり解りませぬと云ふ。それでは私も困る、君に解らぬ神が私に如何して解らふか。先づ君が解らぬ神は如何なるものであるか、明かに了解せられねば、其神があるかないかを判断することは出来ない。それは兎も角も神と云ふ觀念を定めて考へねばならぬ。例へば狐を神と思ふ様な考へて天地宇宙に狐の如き神があるかとお尋ねになれば、私が信じて居る神はそんなものではないと、明かにお答へが出来ぬ。又大木とか大石とか云ふ様な神があるかとお尋ねになれば、そんなものはないと明かにお答へが出来ぬ。一體君は

如何な神を尋ねて居られるのかといつたら、解りませんと答へた。夫れならば今一度お尋ねするが、茲に天地萬物の存在することを認めるか、然らば其天地宇宙と云ふものは原因があつて出来たものであらふか、それはエノルガヤでありましやうと答へた。君は天地萬物の原因を精力と云はるゝが、其精力の存在は確かに認めて居らるゝかと聞いた所が、それは認めて居ると答へた。其精力即ち宇宙の大精力にしてこれ則ち神なりと云つた所が、それならば解りましたと初めて頭を下げた。それで神の概念と云ふものを作ることが必要になつて来る。

近頃西洋の學者たちは色々の研究と發明とに餘念なく競ふて居るが、或學者は雞の卵を作り出したと云ふことだが、其の卵の性質までも自然の雞卵と少しも違ふ處はないと云ふ。所が唯一の異つた處があつた。夫れは此の人工の卵は牝雞に抱せても決して孵化せぬと云ふとであつた。即ち生命がないと云ふことである。天地萬物には自から生命がある。單に精力と云ふ許りでは分ら

ない。眞の神は生命である。又すべての生命の源である。

次に考ふべきは神の意匠と云ふことである。例へば太陽と地球の如きは如何であらふか。何様の仕掛があつて此天地宇宙は活動して居るか、茲に生命がある上に智慧があり意匠があることを認めねばならぬ。

曾て私の宅に鶏を飼つて居たが、夜が明くると先づ雄鶏が埒を離れてククと呼びながら何か食物を見付けたと云つて呼ぶ。すると雌鶏が之を聞付けて出て来る。そして雄鶏は自分で見付け出した食餌を雌鶏に喰べさせる、鶏にも雌雄相愛の情がある。或意味から云へば人間以上に互に相愛して居る。人間も其子を愛するとは知つて居る。これは皆萬物の自然の有様であつて、之れが即ち神の慈愛を現はして居るのである。

扱て如何なる證據あつて此天地宇宙に神ありとするか。之を論證するには前述べた意匠論と云ふのがあるから之を紹介しやう。

今茲に島の中に煉瓦が山の様に積んであるとしやう。處が其積方が無茶苦

茶で一向に何の意味もない。云はゞ其處に煉瓦が打捨てであると云ふ様なものである。然るに此家は如何、同じく煉瓦が積んである。併し其積み様が一定の考を土臺として積んだので、遂に一の家となつて居る。此の長方形に積み上げるには誰か技術の熟練なる技師が設計して之を積み上げたものであらふ。其家の中の構造を見れば講壇もあれば階子もあり、椅子もあり、窓もあり。全く之は初めから其目的を立て、こんな風に構造せられたものと云ふことは誰でも分るのである。斯の如く天地宇宙を研究すれば、此天地宇宙に深遠な精密な細緻な意匠を用ひた跡を發見することが出来ると思ふ。若し心して研究するならば、人間の體だけを研究しても分ると思ふ。僅かにたゞ此の指一本でも研究すればそれが分る。私は此指一本を研究したのであるが、先づ此指は肉と骨とより成り、其骨は三本ある。若し單に金火箸の様な骨のみであれば、重いのであるが、それを軽くする爲に管になつてある。中が洞になつて居るのは弱い。それで其洞になつて居る所には髓と云ふものが入れてある。又單に棒の様に



出來て居れば曲らない。曲らぬとすれば指の用はなさない。指は其三つの骨がよい工合に曲る様に骨と骨との間に一の結目があり、而して内の方には物を握ることの出来る丈に曲ることになつて居る。曲つたものが元の様に直ぐに伸びる。所謂屈伸自在で、其蝶番の巧みなること何とも云はれない。例へば人間の造りしものであれば、機械には必ず油を注すの必要が起る。自轉車の様なものでも油がなくては役に立たない。指の屈伸には決して油は入らない。又骨計りであれば指の用はなさない。つまり真中に骨があるから物を採ることが出来る。處が指の先きの方には骨がないから爪があるので物が摘まめるやうになつて居る。尙ほ此の指の肉を養ふ途も出來て居る。即ち血管と云ふものが二通り通つて居て、一を動脈と云ひ他を靜脈と云ふ。其の動脈からは新しき血を送り、靜脈からは古い血を元の所に返すのである。其動脈と靜脈との間を結ぶには誠に細い毛細管と云ふものがあつて、双方を結び付けて居る。其微妙なとは筆にも口にも云はれぬ程のものであつて、而して恰も上水下水

の様になつて血管が指を養ふて居る。猶驚くべきは茲に盲人が出來たとせん、盲人の爲めにも此指は直に盲人の眼となつて、眼の働きと同じ様なことをするのである。御存知の如く盲人教育が發明せられてより盲人は點字と云ふものを以て文字を読むやうになり、又點字板といふものを以て書くことも出来る。何と指の働きは奇妙なものではないか、單に指の研究に依ても之を造りし神の意匠の甚だ至れることを認めねばならぬ。

又人間の體温の如きも實に奇妙不思議と云はねばならない。先づ人間は體温三十六度五六分と云ふのであるが、入浴して随分高温度の湯に入つても體温を増すことはなく、又如何に冷水に入つても體温を下げることは出來ない。之れは云はゞ人間以上の靈妙の働あるもの即ち意匠ある神が天地を創造せるものと云つて差支ないのである。

古昔希臘の哲學者ソクラテスの有名な話がある。或時多くの弟子と共に大理石の彫刻物の前を通過するや一人の弟子が申すには何と立派に出來た像で

はありませぬかと、ソクラテスは之に答へて茲に一人の彫刻家があつて、先づ初めに男と女とを造つた。所が此二人のものは段々と成長して稍大きくなると、其像から又々男と女とが出来てそれも成長し、又々小さい男女が其二人の中から生れて来る。之れは彼の大理石の像よりも善く出来ては居ないかといはれた。するとそんな像は何處に在りませぬかと云ふので、ソクラテスは彼處にも此處にも其像が居ると人間を指し示めされた。之れはつまりソクラテスが神の創造を云ふたのである。

以上は神の存在を意匠論に由りて證據したのであるが、私が神の存在を信じて居るのはそんな外からではなく、私の心の中にある神の觀念から神の存在を確めて居るのである。

先づ此天地宇宙の實際を観察するに、完全なるもの、無限なるもの、絶對なるものありやと云ふにそれは無い。凡ての物は相對的であり、制限せられたもので、頗る不完全なものである。生理學者の云ふ所に依れば、人間の體の組織は七年

毎に一變するものであると、而して其れは理論上のみでなく實際である。人間の筋肉も骨格も日々に變化して止まぬのである。初めから完全なものはない。制限せられぬものはないが、例へば宮川は毎日一變化して居る。即ち毎時間に變化して居る。時々刻々變化して居る、其點より云へば宮川として取り止めて之れが宮川であると云ふ譯に行かぬ。所が茲に此の大變化の中に決して變化し得られぬものがある。そのものがあるから宮川がある。宮川の肉體は變化しても其變化に伴はぬ一種のものがある。其の顔にも體格にも一貫して現はれて居る。之れは英語で云ふアイデンチテイである。即ち私を知る人は決して忘れぬ處がある。之れは理窟から云へばあるまじきことであるが、實際にはある。兎にも角にも變化して止まぬ中に決して變化せぬ一種の何かがある。之れが抑も何であるかと云ふに、人格と云ふものであらう。此人格が凡ての變化にも打克つのである。云はば物質の制限を受けない又相對には異いなが、併し其相對の中に絶對を意味する様な人格がなくては、此のアイデ

ンチチイと云ふことがなくなる。宮川の一生の變化の中に變化しない一貫したる人格がある。獨り宮川のみでない。諸君も同じ様に持て居られる。之れが人間の尊貴なる所以である。此の人格の根源が神である。神より來れる人格が眞に永久不變にして無限のものである。

猶ほ神は人間本心の源である。人間に一の本心がある。善を爲ば之を賞し惡をなせば之を責むるのである。此の本心に就ては昨年「本心の聲」と題してお話し致したので御記憶になつて居るであらうが、其本心は人間の行爲の前後に氣を付けて正直に我等に教へて呉れる。西洋人は之を神の聲と呼んで居る。神は人間の心の中に最も行届ける巡查を置いて居ると云ふ様なものである。本心は即ち神自身の代理者と云はねばならぬ。云はば神は本心の源である。

明治十五年頃のことであつたと思ふ。私は不圖とした所から基督教に對して一種の疑が起つた。疑はあるけれども教會に立つて傳道はする、それが苦し

い、自分が疑つて居ながら説教もする、傳道もする、其苦しきは逆でも想像は出來ぬ。どうにかして此の疑から逃れ度いと思つて、或晩大いに考へた。基督教が虚偽の宗教であるか、否やを確めねばならぬ。否な基督彼自身が眞實の方であるや否やを考へたのである。而して聖書を讀んだ。聖書を讀んでは又考へた、讀んでは考へ考へては讀みする中に、基督は神の存在に就て何等の證據を以て論議せられた處がない、唯其神を信じて居られる。其神を信じて居られると云ふよりも、其神を父と呼んで居られる、其間に何の偽りらしきものをも見出し得ない。イエスは神を父と呼んで自分の一切のものを任せ切つて居られる。天の父は愛の神である。而も義しきもの、上にも又不義ものの上にも雨を降らし、日を照し給ふ天の父なる神は、空の鳥を養ひ、野の百合を育て給ふ。而して基督は之を人々に語り給ふ時に、其の神に全く信頼して居給ふたのである。そこに虚偽を見出すことが出來ぬ。基督の心事は疑ふとは出來ぬ。基督は神を父と呼び給ふ。それで私は自分の父に就て考へて見たが、自分には父がある。自

分の父があると云ふことを自分で疑つて居ないから、父のことに就ては人々に證據立てする必要は全くない。單に自分の確信を以て父はこれ／＼である、と云ふ丈である。其心事を疑ふことが出来なくなれば、茲に基督の教も生きて來る。其處で私も初めて疑ひの夢から全く醒めた。最早や疑は起すまい否な起す餘地はない、茲に至て初めて私には喜びがある様になつた。

そこで神の父なることを少しく述べて見たい。例へばイエスが神は父なりと仰せになつた處を引照して、時間も少ない事であるから、最も有名な主の祈りに就てお話する。

御存知の通りイエスの弟子が何と祈るべきかと尋ねたときに、イエスは天に在す我儕の父よと云つて祈れと仰せられた。一體基督の神と仰せらるゝ時には名はない。藤樹先生の太乙神經の序文にも素無名のもと云はれた。神には名はない。天の父と云ふて祈れと云はれた。それが如何にも妙味がある、父は萬物の基、天地の源であり、而かも最も尊嚴なる人格の存在である。父とは萬

物を愛する人格と云ふ義で、就中人を愛する人格である。或人が曾て私に神を父と仰いても愛情に足りないところがあるから、天のお母様と申す譯に行かないかと云はれた。私はお父様と申してもお母様と申しても同じものと思ふ、必ずしも男性的とか女性的とか云ふ意味を以ていつてあるのではない。全く親御様と云ふ考へであるから、天の御親と仰がれよと答へたことがある。

以上神に就ては色々な議論を申上げたが、天父とは至極單純で而かも神の御性質を云ひ現はして居ると思ふ。

天の父と申せば唯一の存在者なることも明かである、若し此天地宇宙に唯一柱の神が在しますのであれば、決して固有な名は要らない。天地の凡てのもの、源を稱して父と云ふのである。至純にして愛、全智にして全能、宇宙の外にもあり、宇宙の内にもあり、凡てのものに充ち足れる人格の神である。聖人は強て名を付けて太上天尊太一神と號すと、藤樹先生は云はれました。思ふにイエスは其の初めより天の父と仰せられた許りで、其父は常に自分と共に生きて働

居給ふと云ふことは實際に見て居給ふたのである。私は自分の實驗を少し許り語つて見たい。小兒の時に學校などから歸り掛けに悪童から追つかけて、逃げて歸り我家の門に入ると直ぐに強くなり、而して今まで追掛けたものを睨め付けて大きな聲を上げて怒鳴り付ける、かく態度が全く一變する。之れは何であるかと云ふに、小兒の心にお父様が居ると云ふ信念が直ぐに力となつて顯はれて來るからである。如何であらう。天地の間に我が父なる神が在します、其神は眞に我父で同じ此の天地の中に自分と一緒に居給ふのである。然るに世の中はと云ふに、生活難もあり、貧苦もあれば病氣もある。猛獸毒蛇の害もある。天變地異もあつて、自分等の四圍には恐ろしき敵が群をなして居る。然るに私共が天の父なる神と共にあることを思ひ出すときに、之れは非常な強みではないか。世間は自分を捨て、も神は捨てない。天の父は眞に我の父上で我と共に居給ふのである。

最後に今日の科學者の態度を一言して置きたい。其の代表的人物であると

思はれるのは英國のサー、オリバー、ロッチと云ふ人である。彼は信仰箇條を書いて下の如く曰ふて居る。

余は無限永久の實體に依て凡ての物は成立し而して其實體は指導と愛を垂れ給ふ天父なることを信ず。

余は千九百年前バレスチナに生活し垂教し且つ苦しみたる我儕の主イエスキリストに由て特に人類に顯はされたる神の性格而して其神性は基督教會に於て神の永久の子として世の救主として崇拜さるゝものなるを信ず。余は聖靈は善と眞とに向つて向上せしむる爲めに吾人を助け給ふこと、祈禱は神人交通の方法なること、且つ忠實なる奉仕によりて限なき生命と聖者の交と神の平和に入るべきことを信ず。

と之れは現代の代表的科學者の言であるが、これによつて如何に彼れが眞面目に神を信するかを見ることが出来る。

## 第三講 基督觀

今夕は基督教の開祖たるイエス基督のことに就て講究して見たい。初めは重にイエス基督の一代に就いて精しく述べて、次に基督に對する余の意見を發表したいと思ふ。

イエスの生れ給ふたのは千九百十數年の昔のことである。そこで基督の降誕されし當時の羅馬帝國はデュリアス、カイザルの甥オーグスト、カイザルが羅馬を統一した時で、當時西洋に知られたる國土は地中海の沿岸に散在して居た西班牙、希臘、伊太利を初め埃及、波斯、小亞細亞及印度等であつて、印度は世界の端と稱せられて居たのである。オーグスト、カイザルの帝國は地中海に接したる凡ての國々を征伏して出來あがつたものである。聞く處に依れば此の一統の後にイエス基督は生れたのであるが、つまり世界一統と云ふことは後にも前にもないこととて、誠に珍らしきことと云はねばならぬ。單に一統と云ふので

はない、イエスの生れし其時丈は世界に戦争がなかつたと云ふことである。

イエスはバレスチナの一部猶太のベツレヘムに生れたたと傳へられてある。猶太國は基督の生るゝ前六十年に羅馬の爲めに征伏せられて、一種の屬邦となつてあつた。恰も朝鮮が日本の屬邦である様なものであつた。けれども猶太國は昔から豫言者と云ふ宗教上の眞理に精通せし人を産み出した國であつて、宗教上に於ては當時世界唯一の國と稱せられて居たのである。尤も世界の宗教家と稱せらるるものに西洋に生れたものは一人もない。皆東洋に生たのである。亞細亞の南の方には印度がある、此の印度には佛教の開祖釋迦が生れ、支那の中央には孔子が生れ、アラビヤにはモハメットが生れ、ペルシヤにはゾロアスターが生れ、猶太にはイエスが生れたのである。或人々の考にはイエスと云へば何でも西洋と云ふ觀念に捲き込まれて、西洋の宗教と云ふ様なことを云ふて居るが、之れは間違ひである。猶太は小亞細亞の一部分でペルシヤの南エヂプトの北、つまり其間に介まつてゐる小さな國で、イエスは其處に生れ

た方である。それでイエスは西洋人でない事は明かである。故に其の宗教も亦西洋の宗教ではない。斯くの如くして不思議にも宗教は皆東洋にのみ起つたものである。

當時世界に三大勢力があつたが、それは希臘、羅馬、猶太と云ふ此の三國である。先づ希臘に就ていふならば、希臘全盛の時代の間には二十八聖人を出したと云ふ程であつて、哲學に於ても文學に於ても道義上の學問に於ても將た又科學に於ても希臘は當時天下に冠たるものであつた。

次に羅馬は政治法律に於て世界に有名であるが、今日世界の法治國に行はれて居る法律の淵源は羅馬であつて、我が日本の刑法の如きも幾らか羅馬法に負ふ所がある。

次には宗教で、これは猶太である。猶太は開國以來宗教の發達せし國であつて、其影響が希臘、羅馬の二の特色に比して多くはあつても少なくはないのである。以上の三要素が文明を形成し、流れて全歐洲に入り、米國に及び、終に全世界

に普及して來たのである。

偕て基督はガリラヤのナザレ村の大工ヨセフの家に生れた方であるが、ヨセフは指物大工であつたとのとである。母のマリアと云ふのは賢明な婦人であつて、淑徳の聞へも餘程高かつたのである。父ヨセフはイエスが十三歳のとき死なれたと云ふことであるが、ヨセフにはイエスの外にヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンと云ふ弟と又妹等も數人あつたさうである。右の如き大家族であつたのでその生活は極めてミヂメなものであつたやうに思はれる。

それに長男が十三の時に一家の柱石たる父ヨセフは死んだので、イエスは母及び多くの弟や妹を脊負ふて立たねばならぬことになつた。そこでイエスは此の大任を荷ふて十八年の間父の業を繼いで大工をして衣食の資を得られたのである。此の十八年の間の實歴としては微すべき資料に乏しいが傳説に依ればイエスは善隣の人であつた。彼等はイエスの人格に就ては多少の尊敬を拂ひしも世界を驚かす程の大人格者とは思はなかつたやうである。史家は此

の間を沈黙の十八年と云つて居る。此の沈黙の間にイエスは自から養ひ、自から磨き、自から練り、自から鍛ひ上げられたが、其最も愛讀されたものは舊約書である。其舊約三十九卷の中には歴史もあれば法律もあり、豫言もあれば詩歌文學もある。ヨブ記と云ふは當時の人生觀を歌ひし傑作であり、詩篇は實に朗々誦すべき雄篇である。又イザヤの豫言の如き宗教上の書として尤も重要なものである。其外深遠な心的實驗を経たものが多い。イエスは幼少の時より不幸の生活を送られしが故に、學校などに行つて正式に教育を受けられしことはなかつたのである。唯猶太人の習慣として舊約書を學ばれたので、其母は實にイエスの師匠であつた。イエスが小腕に一家を支ゆる丈の勞働をせらるゝので、母は朝な夕なにイエスを扶けて一家の生活を營み、且つ子女の教育に力を盡し、分けても宗教上の深き修養を積まれた様に思はれる。それかあらぬか、イエスは舊約書に通じた方であつた。殊に舊約第五卷目の申命記は非常に愛讀せられたものと見へる。イエスのお話の中にも屢々其中から引用せられてあ

る。又詩篇の如きも愛讀せられた一部分で、十字架上では詩篇二十二の初めの方を口にせられた。私はイエスと云ふ方は舊約書中法律、豫言、詩歌等を味ひ、茲に宗教思想を養ひ思念を練り、自から教へ、自から鍛はれしものと思ふ。

又イエスは天然の恩恵に浴せられし方であつたやうである。抑も猶太の國は非常に風景に富んで居る處であるが、殊にイエスの住はれしナザレの如きは一步足を踏み出せば鬱蒼たる森林が繁茂して居り、谷間には美しき草花が緑の縁を彩つて居る。眼を西北の方面に轉すればヘルモン山と云ふ靈山が聳へ、又北にはレバノン山脈が蜿々として續き、大レバノンが其奥に屹立して居り、南方にはサマリヤの群山が嶺を連ねて見へて居る。更にヨルダン川の流に沿ふてガリラヤ湖があつて其水の清きこと魚類の多きことは有名である。イエスは其豊富なる天然の恩恵を恣ひまゝにせられたのであらふ。若し諸君の中にパレスチンの風景を御承知になりたい方があれば、徳富蘆花の「巡禮紀行」を繙かれば更に非常なる興味を以て會得することが出来るであらう。斯の如くイ



エスは母の心を通じて神の慈愛に心身を任せ、朝な夕なに天然の美に接して、更に美の神を觀、分けても此の美の奥に生けるものあるを見て生ける神に接し、高尚なる詩歌、深遠なる哲學、眞面目なる宗教上の實驗等を以て自からを養はれたのである。

佐藤一齋と云ふ學者が時に山海の美を嘆賞して、天地の美を見るは學問の一歩なりと云はれたが、實にその通りである。

イエスは斯の如く自然美の中に自からを養はれし爲めに快活にして天真爛漫たる處があつたのである。

或人の考に依れば一體宗教家と云ふものは此の世から遠ざかつて居るもので、所謂出家と云ふ様にして可成深い谷とか奥深い山などに閑居獨棲して瞑目沈思、枯木の如く喜怒哀樂の外に超越するもの、様に思ふのであるが、イエスは全く之れと異なつて居られたかと思はれる。彼れは天地宇宙を見て生ける神てふ觀念を抱き、美を見、眞を味ひ、又善をも加へ、實際生活に悉く之を應用された

のである。彼が毎日々々仕事をしたと云ふ點に就て考へても私はこんなことを考ふことが出来るのである。即ちイエスは自分が大工の仕事をして居られたために小才の利く商賣人、一徹な石屋、又は東西の辨へもなき土方さては此等の人々に給料を渡して、或る時は足ることもあり、不足することもありなど、随分多方面の生活をせられたものと思はれる。普通の人であるならば青息吐息と云ふ様なときでもイエスは其難關を排して進まれたばかりでなく、之れに由りて寧ろ自から鍛練せられ、大宗宗教家の天性を發揮し、艱難爾を玉にすと樂觀せられたのであらう。凡そ人間の心と云ふものは外部の刺激又壓迫を受けるものであるが、併しイエスは此等に壓迫せられない許りでなく、却て此等の間に心の機微を察して人情の秘義を了解し、美しくしく、やさしく、親切に行き届く様に自己を養はれたのであつた。

要するにイエスの自修は三要素を有するやうである、第一は舊約聖書第二は自然界第三は人生そのものである。

さてイエスが愈々世に立たれしは三十歳の時であつた。茲に彼の從弟にしてバプテスマのヨハネと云ふものが居たが、彼の父はザカリヤと云ひ母はエリザベツと云つた。ヨハネは一面仙人的野生的の生涯を送り、駱駝の毛衣を着け、蝗子と野蜜とを食物として居たのである。彼はイエスに先立つこと凡そ六ヶ月前に生れ、又從てイエスより六ヶ月前に公生涯に入つたのである。御承知の通り我日本に於て丁年と云へば滿二十年であるが、猶太に於ては三十にして獨立して公生涯に入ることであつた。ヨハネ既に丁年に達しイエスも少し後れて丁年に達せられた。こゝで一吋當時の社會状態を一言しよう。猶太は羅馬の屬國となつて以來風儀は亂れ、宗教は形式に流れ、國家を思ふ志士とはなく、誠に悲しむべき有様であつた。

扱てヨハネは毅然として立ち、彼は東の方ヨルダン河の邊りに於て説教を初めた。曾てはモーゼの如き大人格者を出し、又イザヤ、エレミヤ、エゼキエルの如き大豫言者を出したるにも拘はらず、四百年の間之れと云ふ豫言者を出すこと

が出来なかつた位に衰へて居た猶太にヨハネが出て、野に於て猛然として獅子吼をしたのである。人々は其聲の大なるに先づ驚き、次に其の見識の高きに服し、更に其心の奥に潜める生命に感激し、幾百幾千の聽衆は彼の説教に依りて悔改め、彼れよりバプテスマを受けたのである。彼は無慈悲の富者を責め、權力を亂用する兵士を責め、不孝の子、不人情の夫、不義の婦を詰りあらゆる罪惡と弱點とを攻撃したのである。

イエスはナザレ村に在て大工の仕事をしながらも、ヨハネの盛名と其評判を聞かれ、ジツとして居ることが出来なくなり、過去十八年沈黙の裡に既に養ひ得たる大精神を以て大飛躍を試みるべき好機會と思はれたので、云はゞ天下の人心を正すは此の秋なり。世の罪を救ふは此の機なりと、疾風の如き勢を以てヨルダン河畔に急がれたのである。見れば聞きしに勝る有様で幾千の人々が側目も振らず熱心にヨハネの話聞いて居たのであつた。イエスも深き靈感に打たれて傾聽された、ヨハネは場面を見渡して群衆の中にイエスを見出して、世

の罪を負ふ神の羔を見よ、是ぞ正しく人類の救主なりと叫んだ。此二者の間には肉體上よりは親戚の續合であり、精神上においては天父に奉仕し世を救ひ人を靈化せんと欲する目的を同うする者なれば、イエスはヨハネの謙讓を許さず其手よりバプテスマを領せられた。

イエスはかくの如くして公生涯に入り、之れより東奔西走傳道の爲めに盡さるゝことゝなり、或は病人を治し、或は醜業婦を救ひ、或は税吏と交り、其間十二使徒を撰抜したり、七十司を薰陶したりして斯教の根底を据ゆることに盡瘁された。其間は三年と云ふが實は二年足らずの短日月であつた。

扱茲に先づ考定して置きたい問題は今より一千九百年の昔にイエスと云ふ人物が果して在られたか否かである。昔から今日までイエスの史的人物なることを否定するものが問々ある、現に我國でも先年社會主義を唱道し、後死刑に處せられた幸徳秋水と云ふ人は「耶蘇抹殺論」と云ふ者を書いて居る、其内容は紹介するまでもなくイエスと云ふは歴史上の人ではなく、詰り後世に於て人の

假作せる人物であると云ふに過ぎないのである。又私の宅に「白粉を洗ひ落せしイエス」と云ふ書がある、之れは洋書から抄譯した者で幸徳と同じやうなことを云ふて居る。兩三年前に英國の學者ダビデスミス博士の著はした「史的イエス」と云書にかう云ふ事が書いてある、イエスと云ふ大工の子が自から神の子だと自稱して世に出て、それに多くの弟子が出来て、遂に其の教が天下に流行する様になつたとして見たらどうであらう。それは不可能である、第二世紀の頃基督の向ふを張る積りで或人がデモナクスと云ふ人を立て、これ眞に神の如き人なり、彼は病を治すことに於ては醫者に勝り、施をなすことに於ては凡ての慈善家に優り、且非常に強健にして百歳の長壽を保つた云々と言ひ觸らし、又或人はアポロニウスと云ふ名で同じ様な事を企て、見たことがある、曰くアポロニウスは非常な人物で其品性は完全無缺であり、其能は全能にして何でも出来た、又其智は全智で知らない處はない、病を癒し、施濟をなし、誠に神の如き人であつたと、二者ともに其觸出しはイエス基督のやうであつたが誰も顧みる者

がなくして消えて仕舞つた。若し夫れイエスにして千九百年前に生るゝこともなく、大工の生涯を送らず、三年の間説教もせず、又傳道もせず、病人も癒さず、十字架にも懸らず、單にガリラヤの人がこんなことを構造して之を世に傳えたならば、基督教が今日の如く世界を風靡する勢を呈するに至つたであらうか、一言にして云へばイエスは確に歴史的の人であられた云々。

英國の學者ミルは御承知の如く、代議政體論、宗教三論等の著者であるが、彼は盛んに基督教を論駁せし人であつた。併し彼はこんなことを云ふて居る。「福音書中のイエスの生涯と品性を發明又は想像し得るものあらんや、ガリラヤの漁夫は勿論パウロも爲し能はなかつたであらう」と。

我邦にも時々斯る説をなす人がある。重野安釋と云ふ博士は曾て兒島高德を歴史上の人物でないと云ふた。成る程兒島高德の名の上に棒を引くことは出来ないことはない。併し兒島に棒を引き得るからと云ふて直に同じ棒を豊臣秀吉や徳川家康の上に引くことは出来ない。よしんば棒は引いても實際秀

吉や家康は假定の人と云ふことは出来ない。その如く基督の名の上に棒を引くことは出来るが之を歴史の上より除くことは不可能である。

イザこれより基督研究の方法に付て一言して見よう。

第一の資料は新約書中の四福音書である、其内に於て馬可傳、これはイエスの弟子のペテロと云ふのが説教せし時に其通譯の任に當つたマコが其説教を主たる材料として著はしたものである、は正確なイエスの一代記である。

二は馬太傳でイエスの高弟マタイと云ふものが最も注意してイエスの説教、比喩、未來記等を骨子として録したもので二十八章より成れるイエス傳である。

三は路加傳でルカの著述である、此人はイエスの直弟子ではなかつたが、使徒パウロの傳道旅行の隨行者であつた、極めて多能多藝な人、醫を業とし、傍ら文學に長じ、又畫も能くしたと云ふことである。

四は約翰傳と稱するものである、これはイエスの高弟ヨハネの作であるや否やに就ては大分議論があつてまだ一定しない、其内容はイエス基督の思想、精神、

靈的生命を描いたもので、馬太、馬可、路加の三傳を外傳と見ればこれは内傳即ちイエスの心狀を叙したものである。

さて最初に申上げた馬可傳は文人畫即ち墨繪の様なもので、筆數は少ないが基督の人格が紙上に活躍してある、思ふには羅馬人の爲めに書いたものであらう、羅馬人と云へば當時世界を征服した軍國的政治的大民族であつたので、本傳の基督は征服者たる大將軍の如く威風堂々たるものである。馬太傳は古の豫言者を重んずる國民たる猶太人に讀ましむる爲めに書いたもので、これにはイエスの豫言者の豫言者たる點が高調してある。路加傳は巧妙精緻筆至らざるなしと云ふべきもので土佐派の極彩色の畫を見る様なものである。約翰傳に至つては恰も佛畫を見るやうなものであつて、寺院の天井畫のそれに似て龍であるか、雲であるか、素人眼には見分が付かぬやうである。本傳は素人の讀んで感心する本ではないが、黒人が讀めば實に深遠幽玄な靈的趣味に満ちたものである。

其他手近い所で御參考になる様なものは、柏井園氏譯ニコルの「基督傳」栗原基氏譯ノイマンの「イエス傳」綱島梁川氏譯ルナンの「基督傳」等である。議會に於て種々な議論の出た時には、議長は原案と反對論に就て採決するには反對論を先きにするこゝとなつてある。私も之に倣ひ基督論に就て反對者から批評を試みて見度いと思ふ。

彼の有名なるナポレオン第一世は實に稀代の英雄絶世の豪傑とまで稱せられた人であるが、彼はコルシカ島より出て、幾何もなく佛國を征伐し終るに全歐洲を統一したので、當時王の王とまで稱せられたがワータールの戰に於て一敗地に塗れて聖ヘレナ島に流されたことは諸君の知らるる所である、一日帝は左右を顧みて卿等はナザレのイエスを知れりやと問はれた。一將進んで存知ませぬと答へた、ナポレオンは長大息して評された、曰く朕は實に驚く、イエスは率るに一兵なく唯愛の土臺の上に神の王國を築き上げられたに過ぎないが、彼れが爲には已か生命を献ぐる者幾千幾萬あるか知れない、朕は王の王とも仰が

れたともあつたが、今將に奈何、嗚呼ナザレのイエスは人ではなかつたと。

佛國の有名な學者ルソーは御承知の通り、民約論の著者であるが、彼れは自然に、歸れと唱道して一時歐洲を震動せしめた程の人であつた。彼のエミールは近世教育學の先驅をなしたものと稱されてゐる。彼は基督教に反對した一人であつたが、彼が希臘のソクラテスとイエスを比較して「若しソクラテスの死狀が聖人の死狀であるならば、ソクラテスは從容として毒酒を仰いで斃れた人である、イエスの死狀は神の死狀である」といつて居る。イエスは從容として死に就かれたばかりでなく、彼は已を殺す人の赦罪を神に祈られた方である。

ヴォルテールと云ふは同じく佛國の學者で、基督教に對して毒筆を揮ふた人であつたが、彼は基督を論じて天下後世驚くべきことがありとせば、基督に超越する人物が出てないことであるといつて居る。

又佛國のルナンは唯理論者であつたが、イエスの人格に對しては少からず敬意を表して、「イエスは實際人間にして絶対の人なり」と稱して居る。次には

英國人であるが、英國には佛國の様な反對者はなかつたやうである。前段にミールの評説を紹介したので、他は時間が無いから略して置く。

以上陳べたるが如く基督教に反對する人々の言論を總合すれば、下の如き結論に外ならない、即ち基督信者の如くイエスを神と見ないにしても、超人又は人間以上の人格と云ふことに一致して居るやうである。

然らば基督教を信する側より論ずれば、彼等の多くは否寧ろ悉くが、イエスを神又は神の子と云て居る。處が今より七八十年前よりキリスト即神と云ふ信條に就ては疑を抱く者が頭を擡げて來た。甲は一體神が人間となると云ふは異なるもの、若し神が人間になるならば、其留守の間は神は存在されないではなからうか。そうではあるまい。神は依然とし存在し給ふに違ない。神として居ながら人間となると云ふことは、理に合はない。そこで神が人となりしには、あらず、人が神に充たされたのである。神の聖き靈力を以てイエスと云ふ人に充滿したのであると主張する。乙はどこまでも舊説を維持し依然として神が人と

なり給ふたのであると云ふ、神は三位一體として父、子、聖靈の三位がある、第一位の父は天に在りて宇宙萬有を主宰し、第二位の子がイエス基督となつて世に現れ、第三位の聖靈が人の心に臨んで感化指導し給ふので、神全體が人となり給ふたのでなく、神の子が人となり給ふた次第であるといふのである。

基督は前章に紹介した通り教外の人でも之を仰いで聖人の聖人、至人の至人、完全無缺の人又は千古無比の人格であると云つて居る。之を一言に云はふとすれば神に充たされし人と尊稱することになる。然れども正統派の人々即基督教信者の最大多数は神人又は神の子として神の如く崇拜して居る。

私は之を神の最高顯現と云い度いのである。私の所見を述ぶるに當りて茲に此思想の依て生ずる處を述べて置く必要がある。

猶太人の見る處に依れば茲に美しい草花がある。之は何だと云ふに之は美の神の顯現であると云ふのである。世人は花は人間の眼を喜ばしむる爲めに咲き出たものであると云ふ、然れども人の見ない處にも花は咲いて居る。奥山

の谷の底にも咲き、阿弗利加の砂漠の中にも咲くのである。之を以て見るときは、美の神の現はれと云ふは一理ありと云はねばならぬ。次に天地の間には種々恐るべき大精力の現はれがある。地震は如何であるか、海嘯は如何であるか、火山の噴出は如何であるか。其他大風の如き大雨の如き人間の力の到底防ぐことの出来ない恐ろしいものがある。是等は力の神の顯現と云ふ。自然の中には實に偉大なる力が現はれて居る。之れも認めねばならぬ。

次は愛の神の顯現である、母親の手に抱かれてある幼兒は無心に眠つて居る、其寝顔を見る母親の眼は無限な愛の顯現である、抱ける母、眠れる兒、此二者の間に存するものは正しく愛の神の顯現と稱してよからう。以上の論點を神の顯現てふ意義に解する事を承認するとせば左の點をも亦承認しなくてはならぬ。

世に聖賢が出づれば吾人は其言行や人格や事蹟に依りて種々發見することである、曰く高尚なる品性、曰く深遠なる思想、曰く偉大なる徳風、曰く純全なる誠實、曰く何、曰く何と、或は一世を風靡し、或は徳澤を天下後世に及ぼす等實に驚く

べきものがある。之を何の神の顯現と云ふのであらうか、美にも勝り力にも優り母の愛にも勝れる此顯現は何と云ふのであらうか、正義の神の顯現とも道義の神の顯現とも謂ふべきである。

昨晚も一寸いつた様に、此天地宇宙は神の靈が充滿して居るのである。其徳が種々の方面に顯はれて來るのである。而して基督に至ては所謂神の全てが現はれて居ると云ふても過言ではないと思ふ。

孔子は聖人として道德の權化であり、釋迦は慈悲忍辱の顯現である。其の他人々の上にも人格として神の一部の顯現はあるがイエス基督の如く、圓滿完全に神自體を顯したものは無い、即ち其智に於て、其愛に於て、其義に於て、其信仰に於て、逆ても他の聖賢の及ぶ所ではない。或は一部分に於ては基督に比すべきものがあるかも知れないが、併し全體に於て圓滿完全と云ふ譯にはいかない。若し茲に水道を敷くならば、其鐵管には清水が充ちて居るから、栓を抜けば清水が溢れて來るのである。之をコップに受くればコップ丈には直ぐ充ちる、併し

コップの水はコップ丈の水量である。四斗樽に受くれば四斗樽一杯になり、一石入の桶に受くれば一石ある、此方の器次第である。器が小ければ水量は少なく、大きければ水量は多い。花は花、鳥は鳥、獸は獸、萬物の靈長にはそれ丈のものが這入つて來るのである。人間は禽獸以上で、其中に於ても聖人は聖人丈に神の靈が充たさるゝのである。

以上の理由に依りて基督には圓滿完全に神自體が顯現せられたのである。ソコデ我が渴仰尊信する所の基督を言明するには實に適當の言葉がない。人間以上と云つては足りない。神人又は神の子と仰ぐの適當なるを覺ゆるものである。

私は十七才の時に初めて聖書を手にしてから今日に至るまで、兎も角もイエス基督の事に就ては常に研究を續けて居ることである。扱て人格の研究と云ふのは實は理屈ではなく、味である、食ふて初めて其の甘味が分ることである。これ或は我田引水とお聞きになるかも知れないが、併し思ひ切つて言つて見よ



う。夫れ基督の語と云ふものは聖書の中餘り多くはない。或人は五十三四は  
あると數へて居る。これ即ちロギヤ語録である。此語録を一所に集めて見れ  
ば、僅かに五六行より多くはあるまい。併しこれは實に高遠偉大なるものであ  
る。私共の話は冗漫になり易い例へば神てふ觀念だけでも極く簡單にした處  
で二時間や三時間はかゝるであらうが、イエスは僅かに一言にしてお盡しなさ  
れた。「曰く夫れ天の父は其日を善者にも惡者にも照し雨を義者にも義からざ  
る者にも降らし給へり」(太五の四五)語は實に簡潔ではあるが、これ以上神を言  
明することは出来ない。イエスは天地に神があるとかないとか云ふ様な議論  
はなさらず、端的に神の公平寛大な徳性をお示しになつた。

かう云ふことを云つては鳴瀝の沙汰とお叱りを受けるかも知れないが、これは  
分り易いやうに言ふて見よう、私は宮川何某の三男である、かく云へば私には何  
某と云ふ父のあることを明にして居る。イエスが天の父と仰せられしは私に  
何某と云ふ父があると同じ様な意味である、イエスは其弟子に祈禱を教へ給ふ

た時にも「天にまします我等の父よ」と云つて禱れと仰せられた。昔より神  
に種種の名稱を奉て尊崇して居るが、天の父と渴仰したものはない、二人二人は  
あるかも知れないがそれは名稱だけに止まつて、眞に天父として渴仰し、且つ人  
をして渴仰せしめたものはイエスの外には見當らない。

明晩の講演の分になるから今晚は控へる積りであつたが、序であるから一言  
付け加へたい、それは未來の生命はあるものであるかどうかといふとである。  
法華經の後の方を見ると二十四地獄と云ふものがある。讀めば誰にも能く分  
る。又ダンテの神曲の中にも地獄のことが書いてある。併し私は此等の地獄  
に就ては多少の疑を抱いて居るのである。之に引代へて約翰傳第十四章の首  
節にイエスは「我父の家には住居多し」と云はれたとが録してある、これ即ち  
天國のあるとを明言せられたのである。かう云ふ天國はありそふに思はれる、  
是れ猶ほ火山の煙のやうなものであつて、煙の出るのを見れば火のあることは  
明かである。イエスが天國と云はるゝ時は出て來る淵源は分らないにしても、

其煙丈即ち天國の存在は信じて居られたことが分る。

又イエスは罪の自覺と云ふものがない。一體誰にても罪の自覺はあるのである。例へば聖人と仰がるゝ孔子でも罪の自覺はあつた、その言に「義を聽いて移る能はず不善改むる能はず是れ我が憂なり」と云ふのはその證據である。處がイエスにはそう云ふ言を見出すことは出來ない。

ペテロはイエスに虚偽の言行のなかりしことを證明して居る、曰く「彼(イエス)罪を犯さず其口に詭譎なかりき」(彼前二の二二)と又イエスは殊更に言行を飾られしことはない。全くありのまゝで其の有りのまゝである處に高尚なる人格を見ることができる。殊に其純潔なる行ひを見るに神と云ふの外はないのである。

古往今來イエスが果して神なるや人なるやと云ふとは大問題である。彼は人以上であつた。否な神の如き人であると云ふとは何人も殆んど異論がない様である。私の味ひ得た限りに於てはイエスを人として見るよりも寧ろ神

として見る方が適當なやうであるから私は神の寫眞と云ひたいのである。花を見ては明かに美を理解し、地震を見ては力の存在を認め、政治振りを見て治者の人格を知覺するが如く、手取り早く申すならば神を知りたければ、イエス基督を見るのが大捷徑である。

## 第四講 人生觀

今晚第一席にお話したいとは人生觀と云ふのである。人間が此の世に生れて此世界をどんな風に見るか云ふとは、古來哲學者の考へた處であつて、今尙ほ一定したものはない。獨逸の哲學者オイケンの「人生の問題」と云ふ書の中にプラトーン以來の哲學者の説を擧げて論じて居る。要するに此世は苦痛である、即ち人生は悲觀であると云ふもあり、之に反して人生は樂觀であると主張するもある。一言にして云へば一方に神が作り給ふた此世界は美しく且つ楽しいと云へば、他方に悲哀が満ちてあると云ひ、而して此外に今一つ折衷説ともいふべきものがある。それは苦痛があるのは事實でそれは打消すことが出来ない。随つて吾人人類は此の世界を新に作り直さねばならぬと、これは進善觀と云ふことになつてある。

そこで人生觀は如何なる者であるかと云ふに、先づ之を三段に分けて述べて

見たい、英語で云へば第一は *Whence* 何處から來たか第二は *What* 何を爲す爲めに  
出て來たか第三は *Whither* …… 終りに何處に行くかと云ふのである。私は幼時  
から何處より來たかと云ふ事を知りたくてたまらなかつた。七歳の時であつ  
たが、母親に向つて私は何處から來ましたかと尋ねた所が、母親は木の股から出  
て來たといはれた。それで不思議なと思つた者の、母を信するの餘りに永らく  
の間の木の股から出て來たものと思つて居つた。西洋では兒童には鷺が持つて來  
たと云ひ聞かせるそうである。私は十一二の時何となく不審の度が強くなつ  
たので、村の智者を訪ねて人間は何處から來たものであるかと問ふた。所が其  
人は溝の中の子子のやうに自然に湧いたものであると答へた。何だか愈々譯  
が分らない様になつたので漢學者に行つて質して見ると、支那の書物の中には  
陰陽和合して天地成るとある。人間も陰陽の和合にて出來たものと云はれた。  
此の陰陽の和合と云ふことは一體何であるか陳奮漢まるて唐人の寢言を聞く  
様なものであつた。其内西洋の學問をする様になつてからダーウキンの進化

論によつて人間は下等動物から段々進歩發達したものであると云ふとが分つた。曰く「猿猴と人間とは同系の動物で云はゞ從兄弟同志とても云ふ様なものである」と之を讀んだのは私が十八九の時であつたから何だか妙なこのやうに考へたが進化論の云ふ所は決して嘘ではない、人間の身體は確かに下等動物から進化したものであらふ。イヤ全く進化したものと思はれる。けれども心までも猿猴から進化した者とは思はれない。創世記の一章と三章とを讀んで見られよ、一の二七に「神は其像の如く人を創造たまへり即ち神の像の如く之を創造り之を男と女に創造たまへり」と書てある、これは云ふ迄もなく人間の心のとてである、つまり人間の心と云ふものは神の心に均しい、神系に屬すべきものである、古來人は萬物の靈長と云ふのも萬物に勝れたるものがあるからである。私は夫れを讀んだ時、大發明でもしたやうに快哉を叫んだのであつた。

進化論の方では身體が下等動物より進化して來たとは明かであるが、人心の起原に就ては全く不明である、創世記はその不明な點を明かに示して居る。尙

研究を續けて行くうちに舊約聖書中の詩篇を繙いたが、其詩篇の第二十六篇の中に神が人間を愛すると云ふとがあつた。曰く「エホバよ我を糺し又試みたまへ、わが腎と心とを練りきよめたまへ、そは汝のいつくしみ我が眼前にあり、我は汝の眞理によりてあゆめり」(詩二六の二、三)、私は神が人間を愛し給ふと云ふとは不可思議でならなかつたが、終るに悟ることが出來たのである、其次第は第一、人の心が神の像に象つて創造れた、即ち上述の如く神系なので平らたく云へば神と人とは父子の關係があるからである、當人には萬物に優れる能力があるので之を支配し且つ統治する權能を與へられたものである。

偕て人間が萬物を支配すると云ふことは人間に取つては嬉しいことには相違ないとてあるが、問題は人間は何の爲めに生れて來たか即ち何をなすべき爲めに生れて來たか、其本領が知りたいものである。犬は何の爲めに生れて來たか、猫は何をする爲めに生れて來たかと云へば三歳の兒童でも明瞭な答が出來る、曰く門守る爲めとか鼠を捕る爲めとか云ふ、扱我自身は何の爲めに生れて來

たか問はれて何と答ふべきであらふか。其答は容易でない、昭憲皇太后の御作に「金剛石も磨かずば玉の光もそはざらん人も學びて後にこそ眞の徳はあらはるれ」と云ふ深奥な歌がある、即ち人間の靈魂は磨かねば發達しないと云ふとである。如何にして我靈を磨くべきかそれが問題である。私は人生の本領は第一人らしい人となることであらうと思ふ。普通道徳を説く者は對人關係即ち父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序ありと云ふが、先づ考へたいことは我の外に人なし、よし無人の島に流されても自分丈は修養して人らしい人にならねばならぬといふ事である。此點に就ては明晩重ねて述べやうと思ふ。

第二は其の磨き上げたる靈魂を以て、否、己が心を磨きつゝ世の爲め人の爲め又は社會國家の爲めに盡すと云ふことである。人間が出来上つた上でなくては、世の爲め人の爲めに盡すことは出来ぬかと云ふにそうではない。磨き上げ出来上つた後では餘り待ち遠い。自己を磨きつゝ他の爲めに盡すべきである、他の爲に盡すことは懸て我心を磨く事となる、それは決して難事ではない。

電車の中でも出来ることである。そこに弱い人が乗り込んで来たが席がないさ！お掛けなさいと直に席を譲る。誰にも出来ることである。今晚は演説があります、御一所に往かうてはありませぬかと人を誘ふ、これ則ち人の爲めに盡すことである。心茲に存すれば何でも手當り次第に人の爲め世の爲めに盡すことが出来る。

尙ほ考へたいとは向上と云ふことである。水は源より高く上ることは出来ない。高い所に置けば何處にても水の供給が出来る。御存知の通り大阪では舊城の一番高い處に水源池が置てある。神戸の様な傾斜した市街でも高い處に水源池があるから、水の供給が自由に出来る。人の爲めに盡すと云ふのも矢張りこれと同じとである。自分が磨けて居らねば實の所は妻を持つことさえ出来ない譯である、妻を持てば一人前になつたのである、自分で衣食住の心配をせねばならぬ。妻があれば子供が出来る、即ち親となるのである。親の資格は自分で作らねばならぬ。人間は自分を磨きつゝ人を助くることが大切である。

自分を改善すると共に他人をも善進せしむる之が人間の務めである。聖書に

「己を愛するが如く爾の隣を愛すべし」と教へてあるが之は教の根本義である。己を愛する如くと云ふのが餘程面白い。讀書家は讀書を勧め、慈善家は慈善をなす爲めに人を勧むるものである。浪花節の好きな人は浪花節を、活動寫眞の好きな人は活動寫眞を、酒を飲んで舞踏でもしたい人は酒を飲んで踊ること、清く正しく愛する人を勧め、實に面白い！己を愛するが如く爾の隣を愛すべし、清く正しく愛する人は自分が潔い正しい教育を受けた人でその如く人を愛し、困難の中を切抜けて來た人は後輩に對して深い同情を表し、時には己を捨て、人を助くることをもなす。己を愛するが如くとは實に面白い。自分を教へ、自分を育て、ついで他人を愛せよとは基督の教訓である。

佐藤一齋の言志録の一節に曰く「人須自省察天何故生出我身使我果供何用我既天物必有天役天役弗共天咎必至省察至此則知我身之不可苟生」と今其大意をつかんで申すならば能く考へて見れば我々が生れた譯は何かの用の爲め

だ。自分は自分のものでなく天の者である。天の者であるから天の用がある。其の用をせねば天の咎がある。考へて此事が分れば自分が譯もなく生れて來たものでないことが解るといふのである。世には自暴自棄するものがあるがこれはよくない。苟も世に生れたものは權兵衛でも太郎作でもお梅でもお竹でも誰れても天の御用がある。其御用をせねば御咎めがある。つまり自暴自棄は出來ぬ。さて人間はそんなに自暴自棄する程つまらぬ者かと云ふに、そうではない、横井小楠の詩に、「帝生萬物靈使之扶天功所以志趣大神飛六合中」と茲に萬物の靈と云ふのは人間の心を云ふ。其人間は天功を扶くるのがその本領である。其精神の偉大なる譯は天功を扶けながら天地六合の中に充盈し且自由自在に飛び廻るものである。實に偉大な考である。こんな風に人の心は大きなもの、廣いもの、高いものであると承知すれば自暴自棄などは出來ぬ。私は嘗て心理學を學んで初めて人間の心の大なることを承知してからは、此方面に非常な興味を感ずるやうになつた。曾て自分も犬や猫の様なものと思ふた

時に比すれば今は雲泥の差がある。私はそれから世の爲め人の爲めに盡すことが餘程楽しくなつて來たやうである。

さて諸君一方から見れば此の世の舞臺は頗る廣く、事項は多い吾人は心行くばかりに盡して見たら如何であらう。例へば京都の疏水工事の如き、宇治川の電力の如き其設計した通りに出來上つたならば技師の其時の嬉しさは名狀することの出來ない程であらう。又機械の發明でも其通りそれが出來上つたときには、云ふに云はれぬ嬉れしさがあると思ふ。私は大阪にあつて煙に苦しむものであるが、大阪のやうな煙の市は實にうるさい。承れば當製鐵所に於ては其煙を焼く新しき設備が出來つゝあるといふが、若し其設備の上に多々改良を加へて、より完全に、より費用の要らぬ様にして大阪中の煙を無くして仕舞ふたならば如何であらうか、實に愉快であらう。何となれば大阪の如きは煙の爲めに非常な害を受けて苦しんで居る人が多いからである。何の發明でも何の事業でも世の爲め人の爲めになるやうなことをすれば、非常に楽しく且つ嬉しい

と思ふ。更に人間の靈魂を救ふと云ふことはより以上に人間のなすべきことで、又より以上の楽しみであることは言ふまでもない。

處が困ることには人間には病氣と云ふものがある、丈夫な人でも働きの出來なくなると。今迄は非常に考ふことの出來た人が何かの爲めに急に考ふことが出來なくなる。随分困るだらうと思ふ。又は大火事が出て類焼する、或は難船する、地震に打たれる、種々の苦痛が生じて來る。之を如何見るかと云ふのが大切である。

基督教の信者は「艱難我を玉にす」と云ふ金言を服膺して居る、羅馬書五の三乃至五に「たゞこれ耳ならず艱難にも欣喜をなせり蓋艱難は忍耐を生じ忍耐は練達を生じ練達は希望を生じ希望は羞を來らせざるを知る」と教えてある、それは凡のと悉く己を磨く手段ともなり方法ともなる。若し病氣に罹つた時は書物を読む、これは神が多忙で書物を読むことが出來ないと云ふので人に病氣を與へて讀書の機會を得せしめ給ふと默會する。誠に難有と感謝して書物

を読めば、病苦の身にあるを忘れることとなる。病氣に由て或は讀むとは出來ないが考へることは出来る。發明など随分病床から現はれて來るものである。

私が熊本時代からの知人の話に、先年神田の大火の時に類焼して全く丸焼となつたものがある。曾て其人を訪ふて御困りであらうと挨拶した所が、いや御蔭で僕も無欲になつた。これから青年學生の爲めに獻身的に盡すことが出來ると喜んで居られた。又其人は六十日許り前に南京蟲を退治するとて煙硝を以て焼て居られたそうだが過つて大火傷をせられた。今度上京中即ち二週間前であつたが序があつたので訪ねて行くと僕も今度は火の洗禮を受けたと云つて居られた。前には家を焼れて青年の爲めに、盡すことが出来る自由の身になつたと喜び、今度は手足を火傷して火のバブテスマを受けたと喜んで、之れも天父の命なりと云つて居られた。所謂一難を経る毎に勇氣日頃に百倍して、これ天の養ひ給ふところであると勵んでいたならば如何であらふ。神が艱難の鞭を與ふるのは己を磨き上げて立派にしたい爲めの聖旨である。神は艱難を

降して其身の責任の重大なることを自覺せしめ給ふのである。

處が我々日本人は死を鴻毛の輕きに比して居ると云ふ。之は一面で他面には大いに死を恐れて居る。或は侍が切腹し兵士が潔く打死するところのみを考ふる時は死を見る恰も鴻毛のやうだが、一般の人々はいたく死を恐れて居る。死を恐れると云ふのは早い話が、數字を讀む時でも四の字を諱むと云ふて電話の番號などでも四の付く番號は皆人がいやがつて居る。四十四などの番號は尤も諱むが、これは四は死に通ふからである。何故に斯くも死を恐るゝかと云ふに、此れは全く未來のことが分らないからである。未來のことが全く暗黒であること云ふことは、實際人間に死を恐れしむる根本であるかも知れない。私は小供の時分から少し宗教の趣味があつたかも知れぬと云ふのは、私が十五の時に熊本洋學校に入學をしてABCを學んだのである。譯の分らぬABCなどを學んで居る時は恰かも砂を嚙んで居る様であつた。こんな時に死んだら如何なるだらう？。随分つまらないものだと思つた。恰度十七歳の時であつた



と思ふが、我が尊敬するゼンス先生は南北戦争に四年の間参加せられたそうだが、其時に實驗せられたことを聞いたことがあつた。何ても先生に相思の人があつて既に約束まで済んで居たのであつたといふとである。處が病氣になつたと云ふので、先生が戰場から驅け付けた時は既に瀕死の状態であつた。室に這入つて見ると親類の人々は病人の寢臺を取圍んで居たので、先生は靜かに臺側に佇んで居られた處が、婦人は僅かに口を開いて「エホバは我の牧者なり我乏しくあらじ」と詩篇二三の一を誦じて溘焉として逝かれた。其時先生は人間の魂は消ゆるものではないと云ふ確信を得られ、それから發心して熱心な宗教家になられた。私は此話を聞いて初めて人間の靈魂は消ゆるものではないと云ふことを知つて非常に喜んだ。私の友人に山崎爲徳と云ふものがあつた。彼は東北の水澤の生れて、前の齋藤海軍大臣や前の遞信大臣後藤男爵と共に、水澤の三俊才と云はれた人であつた。私は山崎とは同級生であつた、一夏相携へて有馬に遊んだとがあつたが、其時彼は風邪の氣味で打臥したが幾日を経ても癒え

ないので籠に乗せて六甲山を越え住吉より汽車にて連れて歸つた。寄宿舎にては如何とも仕方がないので、新島先生の宅に頼んで靜養させたことであつた。追々病勢が進むのでドクトル、ペレー氏と云ふ米醫を聘して診て貰つた所が頗る重患で一週間位の生命かも知れぬと云ふことであつた。そこで同級のもの相談の上ドクトルに向つて病人にその事を知らせて下さいと頼んだ。ドクトルはよし／＼私が山崎さんに云ふて聞かせますと云ふて、あなたは肺病に罹りました。そして中々重い、一週間は六ヶ敷い最早死ぬる者と覺悟をせねばなりません。この宣告をした。私共は山崎が死の宣告を受けたのだからどんなことになるかと内々心配もし、又全く失望して居るかも知れないと思ふて病室を覗いて見ると山崎は少しも失望もせず又心配もせないで、己は最早死ぬるのだそうだが、然し今非常に睡む度いから皆彼方に行けと云ふので、次の室に避けた所が山崎はグッ／＼眠て仕舞つた。大膽と云はんか不敵と云はんか少しも死を怖れて居なかつた。

實に山崎は僅か二十四歳大望を抱いて居つた。彼の才は實に偉い。同級生隨一の人物であつたが彼は一向死を恐れて居ない、いよく死の近づくや愛讀の聖書を取り出して僕は此聖書を讀んで大切と思ふ所には赤い捧を引いて置た。是は僕の精神を罩め誠意を盡して讀んだものだから、僕が死んだら之を讀むて見て呉れ、基督教は本當に眞理であると喝破して永き眠に就いた。私はかう云ふ死の状態を親しく見て、人間の靈魂は不死不滅のものであると信ずることゝなつた。請ふこれより少しく其理由を述べて見よう。

第一の問題は人間の靈魂は何であらうかと云ふことである。世には人間の靈魂即人間の腦髓であると云ふ説をなす者がある。これは重に醫者や科學者や心理學者などに多いやうである。つまり今日の解剖學上から腦の組織の外に靈魂など云ふ組織的な他の存在物を認めぬと云ふのである。彼等は顯微鏡を以てしても腦髓の外に靈魂らしきものは見へないと云ふ。私は腦髓が靈魂であるとの説には同意は出來ない。同じ解剖學上よりすれば鳥にも腦髓はあ

り獸にもある。猿や猩々などの腦髓は人間の腦に餘程宜く似て居る。解剖學上からは全く同じだと云つてもよいほどである。

又胎生學上から申せば胎兒の状態は猶一層似て居る。猿の胎兒は人間の胎兒に比すれば少々毛が多い位なことである。然るに猿や猩々は言語を發することが出來ない。そこで腦髓は似ても、又胎生の様子は似て居ても實際の人間と猿や猩々とは大に異なる點がある。第一人間には進歩がある、其進歩と云ふ點に於て動物は人間に比較し得る何等の進歩がない。單に靈即腦の議論は立ち難い。考えて見られよ、腦髓の外に何かがあるてはあるまいか。動物には本能と云ふものがあり、其本能に次で智慧も認められる、然しながら本能以上には行かない。猿には猿の智慧、犬には犬の智慧、猫には猫の智慧と云ふ様なものがあるかも知れないが、人間の智慧とは違ふ。況んや人間の靈魂と云ふものと他の動物のそれらしきものと全く違つて居る。要するに腦の外にあるもの、之を靈魂と云ふのである。

早い話が電話に就て考へて見ても直に分ると思ふ。チリン／＼と云ふと直ぐ誰か居てモシ／＼と云ふ。其誰か居ないでもチリン／＼と鳴る。機械丈けては電話の働きは無いのと同じやうになる。電話の用を辨するのは其機械の外に人が居るからである。其人が居なければ電話丈けては用は辨せない。人間の脳は一の機關で、此の機關の後に人間が居る即ち靈魂が居る。外部からの刺激がどんなに強くても之を受取る靈魂がなかつたならば此の電話は役に立たない。

又人間の身體は素より物質にて組織せられて居る。それで學者の云ふ所に依れば七年毎に新陳代謝して仕舞のである。私共の眼には此等の變化は認め難いかも知れぬ。併し實際に變化しつゝあることは事實である。處が若し物質の組織以外に何にもないものであるならば變化のみで少しも同じ形を留むると云ふことがない筈になる。若し此形に留まる或ものがないならば幼少のときの風采は少しも残らぬ筈で、若其風采に何も残らぬとすれば人の記憶に留

まる程の特徴はない。處が私宮川は茲に終始一貫して變化に伴はない何ものかある、これは物質の外でなくてはならぬ。物質は變化して止まぬものである。それで其變化の中に變化せぬ或ものがあることを想像することは無理でない。私に取つては物質の組織的に存在すると同じ程度に於て一貫する或ものがあることを想像し、若しくは信するのである。これは諸君にお強い申す譯には參らないが、私は物質の組織の外に何かあることを以て人間の靈魂の存在を意味するものと信じて居る。

又人間の心の中に永久の意識がある。非常に高遠な望がある。若い時は眼の前の事のみ考へて一向に將來の事など考へないのである。けれども歳を老れば種々な考が出て来る。随分汚ない考も起つて来る。五十にもなれば此世に何か残したくなる。名が残したい、名でなければ金力で何か残したい、銅像でも残したい。併し考一考して見ると此の銅像には永久の死が伴ふて居る、何程立派な銅像を建て、貫つてもこれはいつか打毀たるゝやうなことがある、嗚呼

無常？

私は八十四まで生きると定めて居る。少くとも八十四までは大丈夫生きられる。野蠻人は衛生の道を知らぬから天死をする。文明人は衛生を重んずるから長命である。殊に私は衛生を重んずるから普通の人が七十年まで生きると云ふから其七十に二割を加へて八十四まで生きて居る積りである。私の心には永久に生きたい望がある。誰の心にも此永久存在の意識がある。もし其意識がないと云ふならば、それは物質論の爲めに打破せられたのである。

凡て人生の希望と云ふものは何處の國民にも永久的のものである。彼のエスキモの如きは氷の中にて油を食ひつゝ、永久に生きて居たいと云ふて居る。野蠻未開の人々は其程度に相應したる希望がある。其希望の中には必ず永久の分子があるのである。

又古今東西の書籍の中には此永久の希望が書いてある。支那の經書には文王陟降して帝の左右にありと録してある、そこに永久の思想がある。孔子は神

を祭るに神在すが如くすべしと教へられた。西洋の書中には永久の希望を意味する句が多い。今の人も昔の人も此點に於ては同じで、誰でも永久の希望を有して居るのである。

今一は科學が教ゆる價值なるものである。彼等の云ふ所に従へば價值の存するものは滅せない。汽車中で買ふ茶瓶は誰も保存しやうと思ふものはない。不要だと思ふて直に打捨て、仕舞ふけれども、茲にある茶瓶の如きは保存せらるゝ。それは價があるからである。圓山應舉の虎の繪の如き、狩野法眼元信の繪の如き、渡邊華山の繪の如きは價が高い。畫繪として價の高いものは倉庫の中に又箱の中に保存してある。此世の中に價值のある物は皆保存せらるゝ。是は事實である。人間の人格は尤も價值のあるもので、然も高いものである。其人格は滅ぶることはあるまい。孔子は七十にして心の欲する處に従へども規を越へずと云はれた。夫れ程高い貴い人格が一朝にして滅するとは思はれない。物を作り上げるに相當の骨折りがあつた。人格を作り上げるには一層の

骨折である。其人が死すると共に人格が滅亡するとは考へられぬ。私の肉體は死しても私の靈は永久に生きたいと思ふて居る。約翰傳十四章に録された處が吾々基督教徒の人生觀である。

### 第五講 基督の救

御参考の爲に哥林多前書第一章の三十節を御覽ください。曰く「爾曹は神に由りてキリストイエスに在りイエスは神に立られて爾曹の智慧又義又聖又贖となりたまへり」と茲に基督教の救には四方面あることを認めねばならぬ。

困つたことには人間と云ふものは煩悶があり過ぎる。人間到る處に煩悶がある。私の宅にも澤山の煩悶者が来る。東京の番町教會の綱島牧師は煩悶解決の看板を出して居らるゝ故、それは、非常に來るとうである。思ふに古の武士中には煩悶病者などはなかつたであらう。儒者學者の中にも餘り聞かなかつた。佛者の中には稀にあつたかも知れない。西行法師の如き其一例である。無智蒙昧な八瀬大原の女達にも煩悶などはなさそうである。かの京都御所の御庭を掃除に來る大原女を見られよ、お晝になれば樹の蔭に座して中飯を食べ、後では引くり反つてソコに寢て仕舞ふ。氣樂なものだ。夕方になれば又

歌を唱ひながら己が家に歸りゆく。一向に煩悶のありそうな風がない。唯煩悶の多いのは高等女學校の卒業生とか。高等師範の學生とか。又専門學校の卒業生とかである。大學にも随分ある。女子大學にもある。教育と煩悶、何かの因縁でもあるやうに相伴ふて居る。實に困つたものである。教育では此煩悶病を癒すことが出来ないと見ゆる。男は蒼白くなつて鬱ぎ込み、女はヒステリイを起して泣いたり笑つたりする。要するに煩悶に罹る者は如何なる種類の人であるかと云ふに、云はゞ半可通の連中である。そこで其煩悶病に罹つた時に奈何にすれば免れ得べきか、その途を考へねばならぬ。之を救ふの途如何。

曾て兵庫縣師範學校の卒業生の或方から手紙が來た。無論煩悶の解決を要求するのであつた。一日其人が私の宅に訪ねて來たが如何にも一見して煩悶者たるのが明かであつた。種々話を交えた末彼は煩悶を解決せられて去つたのである。私の考では第一光を興ふると云ふとである。即ち天來の光明に依つて悟りを開かしむるとである。一體人間は何處から來たか。何如なる責任

があるか。其務を終へて何處に行くかと云ふとが解れば煩悶はなくなる。暗路を迷ひつゝ行くから煩悶があるので、光があれば其足下を照らすから迷は無い。迷いがなければ煩悶は無くなる。基督の言に「我は世の光なり」と云ふ句がある。之は人生問題の解決を興ふる大切な鍵である。基督が此世に出てられたのは世の人を救はんが爲めである。馬太傳十一の二八以下には「凡て勞れたる者重きを負へる者は我に來れ我爾曹を息ません我心柔和にして謙遜者なれば我軛を負ひて我に學べ爾曹心に平安を得べし」と録してある。吾人は如何と云ふに、天の御用を爲す爲に此世に生れ出でた者である。御用が終れば死んでもよい、又前にも述べた通り「艱難は汝を玉にす」とある。艱難に依つて自分を立派に鍛ひ上げねばならぬ。眞の智慧は天から來る。自分の心から出るものは往々にして自分を陥るゝものである。須からく聖書を讀むが可い。聖書には天來の智慧即天來の光が充ちて居る。明治二十二年に非常な洪水があつて大阪市中大騒をしたのであるが、町の往來は出来なくなる。蓋へてあつ

た日用品は段々減つて来る。私の宅には二人來客があつて非常に困つた。然るに子供は平氣なもので何とも思つて居ない。却つて四邊の光景が變つて來たので寧ろ喜んで居る。米のなくなるなどは少しも心配せぬ。お客が歸つたらさびしくて困ると云ふやな顔をして居る。どうして子供は平氣で居られるかと云ふにこれは両親があるからである。両親は子供に取つては萬能者である。其萬能者と共にあるから安心であるからである。吾人人類は白晝に大道を活歩して居るやうなものであるべき筈である。それに煩悶したり心配したりするのは考へ過ぎてである。何故かと云ふにそれは領分を越へて居ることに氣が付かぬからである。神が人間の事を心配して居らつしやることが分らぬからである。戸締りをして要心するのは吾人の領分では是非共そうせねばならぬ。寢て仕舞へば神のみの領分となる。家の内に盜人が來て米や錢を盗つても人はどうすることも出來ない。これは人間の心配する處でない。寢る前に戸を締めて置けばよいのである。病氣でも同じこととて、先づ醫師に診て貰ひ、藥

は飲まねばならぬ養生はせねばならぬ。然しながら癒るか癒らないか、生か死か、それは神の心配し給ふ領分である。銀行に金を預けて毎日／＼行て見る。私の金がありますかと尋ねる。これは馬鹿の骨頂である、銀行に預けた上は銀行の責任である、之に干渉する必要はない。天來の光を受ければ、吾人は爲すべきことを明瞭に了解することが出来る。そうすれば決して神の領分を犯さないやうになる、安心なものである。爲すは、人に、ある、成るは、天に、ある。之が私の實驗である。

次の問題は、不義、奸惡の世を、如何するかと云ふことである。此世は實に惡の充ちた處である。知らず／＼の内に吾人も惡に感染するやうなことがある。自分でいくら向上せんとしても周圍の惡の爲めに同化せられて仕舞ふのみならず、自分の心の中にも惡念が萌して惡の競争を始めることもある。然れば如何にして此不義罪惡に打克つて進歩向上することが出来るかと云ふに、それは神の義を覺ることにある。

イエス基督の御人格は縦から見ても横から見ても一點の汚がない。恰も太陽の光の如く正義の光を映射してある。馬太傳五の二十に「我爾曹に告ん學者とパリサイの人の義よりも爾曹の義しきと勝れずば神の國に入ると能はじ」とこれは人見せに正義を主張する様なものでなく、神の前に正義をせねばならぬとの主張である。私は基督を學んで天の神は我が胸中を見透し給ふものがあることを知つた。心の底の底まで見透し給ふことを知つた。それが十八才の時であつて、爾來今に至るまで私の胸の中に彫り付けられてある。世の人々は人間相對とのみ考へて居るから、人間が知らない時はどんな悪いことでも平氣とするやうになる。處が私にはそれが出来ない。私が何をして居るかは神が見て居られる。若し悪いことをしたならば神の心を痛める。今自分がした事で神の心を痛めるとすれば、容易に悪は出來ぬ、惡の小なるを以てなすことなかれ。それが人間の前のみでなく只獨り居る時でもそうなくてはならぬ、これが實に大切な考である。南洲翁の所謂「天を相手にする」とは此事である。

熊澤蕃山は人見て善とするも天の見て惡とするとは敢てなさず、人の惡とするも天の見て善とする所は我之を爲すと」言はれたが、これ實に本心の命である。これが正義の神の與へ給ふ標準である。吾人は自己の本心の叫びに従ふのであるが、實は基督の御人格を手本として其通りにするのである。

其次は數歩を進めて聖潔の境に入るとである。此聖きと云ふは水の清きと同じとて、水道の水が清ければ器に受けても水は清い。私共が心の中に雜念妄慮が充ちて居たならば直ぐに自分を汚す者である。馬太傳五の二八には「婦を見て色情を起すものは心の中すでに奸淫したるなり」と云ふ基督の言葉がある。吾人基督を信するものゝ心の中には先づイエス基督の弟子なりと云ふ心が起るので、これが聖い生涯の始まりである。私共は夜も晝も先づ範を基督に取り度いと思ひ、寢ても醒めても基督の御人格を慕ふて居れば、雜念妄慮の如きは段々に無くなるやうである。私は人間の偉いことを信じて居るが、それは己が憧憬する人に似ると云ふことである。念々其人に似たいと念すれば遂に自



己を其人のやうに造り上げることが出来る。私共は常に基督を念ずる、聖なる基督を念ずるのは基督に依りて己を聖化する所以である。

最後に考へたいとは罪惡の自覺である。吾人日本人には罪惡と云ふ觀念がない。佛教では罪に就て云はぬではないが、一向宗の如きは慾惡煩惱を抱へながら彌陀の本願に入ると云ふので罪の自覺は非常に軽い。基督教では罪の自覺と云ふのが教の始まりである。罪とは爲すまじき事をなすの謂ひである。之は普通の人もそう思ふて居る。基督教では之に加へて爲すべきことを爲さないのも罪になるのである。惡は爲すまじきとて、之を爲せば罪である。善は爲すべきとて、若し之を爲さざれば矢張り罪で、寧ろ惡をなすよりも重いとまで考へられて居る位である。惡は素より爲すべきでない。人間は善を爲すべきである。其善を爲さないのは人間の本分を欠ぐので基督教ではこれが罪である。これは僅かな事ではあるが、電車に乗て老人や婦人に席を譲ること、これ即ち善を爲すことである。其善をしないと、それは罪を犯したと云ふことになる。途

中で子供が泣いて居るのを見て之を世話して連れて行くのは誰にでも出来る善事であるが、夫れをせねば罪である。

次に言ふまじきことを言ふも罪である。畜生、馬鹿、野郎など口にまかせて人を罵言する人があるが、これは罪である。けれども基督教では尙一層深刻な教を立してある。言ふべきことを言はぬが罪である。隣の夫婦が喧嘩をして居る、一寸往て諫止せねばならぬと思つて居ながら諫めない、子供が惡戯をして居る、一寸云ふてやらうと思ひながら云はない、これは矢張り罪である、怠りの罪である。次は思ふまじきことを思ふは罪である。彼奴打つてやれと思ふ、彼奴が死ねばよいなど思ふ。このやうな思ふまじきことを思ふのは即ち罪である。けれども之に加へて思ふべきことを思はぬのもそれが罪である。何か氣に掛けることを見ても聞ても嗚呼氣の毒なと思ふ、而して其人を思はねばならぬのに思はぬ。不親切を生ずるので罪になる。かくの如くに觀じ來れば罪だらけである。だから基督教は嫌はれる。右を見ても罪、左を見ても罪、あまり罪々と云

ふので世間の人が基督教を捨てるのである。そこになると自然主義はよい、デカダンはよい、行きなりバツタリ、やり次第、快樂々々で押し通せる。ところが基督教ではそうは往かぬ。男は石部金吉、女はお石になつて仕舞ふ。

御存知の通り救世軍では頻りに醜業婦に向つて自由廢業を勸める。自由廢業を希ふ者の言に務めが辛いからと云ふ。醜業はつらいであらう。彼等は人間の操を賣ることが罪惡であると云ふことが分らない。男がそれを買ふ。これも金で自分が買ふので罪とは思はない。之れが罪惡であるとは考へない。普通人がそう思ふ許りでない。随分有名な學者の中に、娼婦を弄ぶことは人間の自然など、愚にも付かぬ議論をして居るものもある。基督教會にてはこんな大罪を犯すものがあれば、教會から放逐して仕舞ふ。斯の如く四方八方から罪を考へ罪の性質を研究して人間の眼の前のみでなく、神の前天地神明の前に罪を犯してはならぬと云ふのである。一旦罪の淵に陥てからは悔んでも何にもならぬ。曾て或老人に會つた處が、其老人が云はるゝに私は既に七十になり

ます、今になつて考へて見れば誠に濟ぬことをいたしました。最早や取返しので付かぬことを致しましたと。それはこうであります。正妻に子がないので、親類縁家のものが、妾を入れたらと云ふので、昔のことですから子孫を絶やさぬと云ふ口實の爲めに妾を入れました、三人ばかり子供が出来ました。考えて見ると子供は妾腹の子であり、婦人はいつまでも日蔭者で頭は擧りませぬ。私は同情に堪へませぬので縁付けて遣りました。實の所は私が悪かつた親類縁家が何と云ふとも私がちやんとして居れば慥に何事にもなりません、矢張り私が肉慾の奴隷になつて居たから妾を入れたのであります。餘り苦しいので福澤先生に行つて何にか罪の除かるゝ途はありませぬかと尋ねました。處がそれは柱に釘を打つたやうなものである。釘は取つても其釘の跡は残つて居ると云はれました。悔ひ改めても此罪の跡は残ります云々。扱基督教には贖罪と云ふことがあつて、主イエス基督は世界萬民の爲めに十字架と云ふ恐ろしい死刑にお遭ひなされた。舊約の以賽亞書一の十八にかう云ふ句がある、曰く

「なんぢらの罪は緋の如くなるも雪の如く白くなり、紅の如く赤くとも羊の毛の如くにならん」と、其意味は眞に悔ひ改めさすれば跡方もなく罪が消へて仕舞ふと云ふのである。多くの基督教の信者は之を其通りに信じて居る。今一つある。それは約翰傳第三章に録してある、新生の経験である。前述の悔改と云ふのはア、我過去の生涯は悪かつたと自覺して、其悪いとは斷然廢止し、再び悪いとせぬ様になるのであるが。茲に新生と云ふのは單に今迄の様な惡事をせぬと云ふ許りではない。これから善いことをするといふことである。自己中心で自分さへよければと云ふて居たのが、神を中心として神の聖旨に従ひ、人の爲め世の爲めに善をなすと云ふのである。即ち生れ更ることである。私は基督教の力に依つてそれが出来ると思言して憚らない。實例を以てお話しすれば、第一が使徒パウロの悔改め及其新生涯である。使徒行傳をお讀みになれば詳に示してある。彼は元とソローといつて居たが、初の中はイエス基督の聖旨に反對した男で却々恐ろしい人であつた。それが全く悔改めて更に新に

生れ更つて基督教の大傳道者、基督の直弟子となり更に使徒と云はれる人になつた。

次はオーゴスチンと云ふ人であるが、彼は頗る才智の勝れた人物で、且つ早熟な方でもあつた。十五才の時に妾を設け、子まであつたと云ふことである。非凡な學才を有して居つたが、放蕩三昧に身を持ち崩して居た。其母親のモニカと云ふのは賢婦人で、熱心な基督の信者であつた。我子オーゴスチンの爲めに非常に心配し彼の救の爲めに神に祈つた。オーゴスチンは三十才にして母の愛に感じて、遂に今迄の非行を悔改めた許りでなく、其天才を發揮して神學を研究し、二人とない程の學者となり、熱心なる基督教信者となり、信仰の泰斗とまで渴仰せらるゝことゝなつたのである。

次はマルチン、ルーテルである。彼は其友人が雷死したのを見て、自分の生涯を轉換して基督教信者となり、羅馬法皇に對抗して遂に新教を開いた。

次はイグ・ネシヨス、ロヨラである。彼は歐洲の宗教に一大貢獻をなした人で

ある。此等の人々は獨り自ら更生して新生涯を見出した計りてなく、歐洲の宗教界道德界をも一新した偉人である。初めのまゝであつたならば不道德の人不信仰の人であつたが、全く基督教の力で悔改し、更生して神の聖旨を奉じるやうになつたのである。

單に基督教を聞いて洗禮を受くる許りが基督教の信者と云ふのではない。

第一は煩悶から救はれて煩悶せぬ人となり。

第二は不義の行を止めて、神の國と其義を求めて世を聖化する人となり。

第三は雜念妄慮から救はれて聖人の境に入り。

第四は罪より贖はれて更に新しき生涯を始めることとなる。かくして基督教は世を改善進善せしむることを以てその使命として居る次第である。

## 第六講 祈禱

私の同郷の人で且つ先輩で、巨萬の富を作つて居る人があつた。一日訪問した所が劈頭第一にかく云はれた曰く基督教に拜むと云ふことがないならば、直ぐに信者になるがどうも拜むと云ふことがあるので嫌になると。私は之に對して若し基督教に拜むといふことがなかつたならば、私は基督教の信者にはならない筈である、何となれば基督教から拜むと云ふことを除いたならば、儒教と別に異るところはないと答へたことであつた。

基督教では禮拜又は祈禱といふことは非常に大切な事として執行されてゐる。人は祈禱といへば宮や寺で行ふ加持祈禱と同じやうな聯想を起すかも知れないが、それは祈禱の一種ではあるが極めて程度の低い卑いもので、虎列拉病とかペストとか赤痢病といふやうな流行病のある場合に、神佛の加護に依りて疫病を免れたいといふ心より祈禱するものであるが、吾人基督教徒の間に行れ

である。祈禱はそんな卑いものではない。祈禱は人生最高の特權と云ふても可い位なもので、是以上人間に尊いものはないのである。王侯貴人に謁見するといふのが尊いものであれば、天地宇宙の主宰者たる神に咫尺することは人間最高の面目と云はねばならぬ。そこで祈禱の意義から説かなければならないが、祈禱本來の意味は神と精神上の交際を、と云ふこと、精神的に我等の心を通はしむる謂である。

扱て交際と云ふものゝ影響を考へて見度い。先づお互同志の交際に就て考へても、孔夫子は「己に若かざる者を友とすることなかれ」と云はれたが、之は大ひに理由のあるとて、若し自分より品性の下等な人物に交り、屢々其人に接すれば次第々々自分の品性も下劣になる、之に反して自分よりも高尚な人物に交り、其智慧、其學問、其德行、其の人格に接すれば必ず自分も向上發展することなるのである。神は天地宇宙の主宰者にて在はします。一昨夜も一寸御話した通り神は最高最善にして至仁至愛の御人格である故、朝に夕に渴仰禮拜する

時は神自體が己が心の中にありありとわかるやうになり、且つ己が品性が高まるばかりでなく、大きくなることを覺ゆるものである。海外旅行先で或人が製造場に案内しようかと云ふて呉れた時、私はそんなことは誰でもする、我が海外旅行の目的は人間製造の状況を見度いのであると云つて大中小の學校を見てあるいた。米國ではアモスト大學に知人の子が寄宿して居つたから先づ之を訪れ、大學寄宿舎に入った所が入口の扉が二重戸になつてあるので何故かくしてあるかと聞いたところが、其答が面白い、曰く聖書を読んだり祈禱をしたり又學課の勉強をなす時、隣や廊下の話聲や靴音など内に聞こえないやうにとの注意からである。いかにも外に聲が洩れては外の障りとなり、又外の騒ぎや響が内に聞えては精神の統一を缺く、よき思付きであると感じたことであつた。其後英國のオックスフォード大學に行つたときも、同じく寄宿舎を見てあるいたが、これは尙ほ一層行き届いてあつた。此處では一人の學生が三つの室を占めて居る。最初の所が客間兼讀書室、次が寢室、次が炊事場になつてある。

此の如く歐米の學校では寄宿舎の構造が或は二重戸であり、或は一重戸であつても、一寸も外の聲が内に聞へないやうになつてゐるのは學生が朝夕神前に膝を曲げて靜かに祈禱する爲めてである。又朝稽古の始まる前二十五分乃至三十分教師も學生も共に一堂に會合して讚美歌を唱ひ、聖書を讀み、祈禱を捧ぐることとなつてある。嘗て米國のスムス女子大學を卒業した婦人に「あなたが在學三年間に於て一番深い印象を與えられたのは何であるかと聞いた所が、其答にこれは私一人ばかりでなく、彼の學校を卒業した總ての者が異口同音に云ふことは、シイレ校長の朝の祈禱のときの其の眞率なる態度と祈禱をされる敬虔の狀態であつて、こればかりは生涯忘れられまい」とのことであつた。

英米の學校はかくの如くにして、天地宇宙の神の聖前に自省自修を教めるととなつてある。殊に英國では屢神前にある稽古をすると云ふ語を耳にするがこれは他國では聞いたとがない言葉である。思ふに世界到る所神の在まさない所はないが、人間常に放心して居るので神の在しますとも打忘れてある否

な兎角忘れ勝ないので、常住座臥神の御前に常にあるといふ思念を存するやうに稽古を積むと云ふとである。オックスフォード大學には凡そ三千人以上の學生が居るが、其中或は醜業婦に戯れ或は飲酒に耽ける様な者は十分の一位あるとのとである、そうすると二千六七百位は先づ立派な堅實な者と認めねばならぬ。いかにも學生の最大多数は立派な學生であることは大學所在地の模様で信ずることが出来る。かく多数の立派な人間が出来るといふものは實に偉らしいことである。何故かくも立派な人間がかく澤山出来るかといへば要するに神前にある、いつ如何なるときでも決して神前を離れることは出来ないといふ敬虔なる思念に起因するものと思はれる。此敬虔の念が充實してあれば家庭にあるときも社會に立つ時も常にしつかりして居ることが出来る。さればにや英國人のみは他國人に比して幾らか徳も高く従つて品行の正しい人が多いやうである。

扱て祈禱は天地宇宙の神に咫尺するだけかと尋ねれば、祈禱には祈願が要素

である例へば天下に大事業を荷ふて立つとせんに、自己の力では足りないことを自覺するか又事志と違ひ奈何ともなし難い危急の場合には、神に向つて其祐助を祈らざるを得ない。又家庭に病人があつて醫者も匙を投げた、もはや人力の及ぶ所でないといふ場合は、是非病人を救ひたい刹那には眞心を置めて祈願する、祈願は止むに止まれぬ人の至情から發するものである。

世界の文學史を見るに、文章の書方には上より下に、下より上に、或は同等若くは同輩に對する等種々異なる點があるが、其中で上から下の者に送れる文よりも、下から上に奉つた所の文が立派な様である。上奏文又は頌徳表の如き其適例である、殊に人が神に奉つる所の文章即ち祈禱文には眞に高尚幽玄で眞實なのがある。舊約書中では詩篇九十篇の如き、哈巴谷書三章の如きは其適例である。新約書中には約翰傳十七章を看られよ、これは基督最後の大祈禱として録したものである。又馬太傳六章の五乃至十五は基督が其弟子達に教へられた祈禱文である。今諸君に聞かせたいのは路加傳十一章の二乃至四である。即

ち「イエス曰けるは祈る時は斯いふべし、天に在ます我儕の父よ願くば聖名を尊崇させ給へ、爾國を來らせ給へ、爾旨の天に成るごとく地にも成せ給へ、我等の日用の糧を毎日に與へ給へ、我儕に罪を犯す者を見て免せば我儕の罪をも免し給へ、我儕を試探に遇せず惡より救ひ出し給へ」。之は今日の研究によれば基督が教へられた原文は更に簡單であつた、曰く父よ爾名を崇めさせ給へ、爾國を臨らせ給へ、我儕の日用の糧を毎日に與へ給へ、以下上文と同じ、これは極めて簡單なる言であるが之を深く味へば基督教の祈禱なるものは、少しも加持祈禱の意味を含んで居ないばかりでなく、道徳の上から考へても實に立派なものである。吾人此の文意をよく解し、此の通り日々祈禱をなし、その精神で家庭を治め、事業を經營し且つ國政を料理する時は眞に理想的である、少くとも理想に近いものが出来るであらう。請ふ少しく解説して見よう、爾名を崇めさせ給へ……人格の神を我が神として奉仕し、其御名をあがめようとすれば我人格が下劣であつてはならず、又我言行や態度が野卑であつてはならぬ、此人にして父の名を辱

めないこと云ふことがあるが、いかにもそうである。吾人基督者が世の尊敬に價するやうな人格を有するてなくては此聖句は實現が出来ないこととなる。

私の古い同窓生で某といふのが、大阪邊に居る。此の人が或集會の席上で私を紹介してくれた時、私は何だか嫌な気分になつて、思はず顔を赤めた事があつた。もし世人も尊敬して居るやうな人格の高い人が紹介して呉るれば自然自分の肩身も廣まることである。

天の神に仕へるにしても、立派な紳士淑女が神前に立ちて祈禱を捧ぐれば、自然神の聖名も尊崇せらるゝことになる。それが反對に「ても信者」そんな者がありとしたらばが祈禱すれば、神の聖名は卑しめらるゝことになる。要するに口先は末である。人格を以て崇むることが肝要である。爾國を臨らせ給へ……天國に於ては虚言、偽りは無い。神の心の通りに神の心が行はれて居る。此の世も神の心のまゝが行るゝ國にしたいと云ふ祈禱である。世界どこに往つて見ても遊女屋があり、賭博屋があり、酒店があり、まると惡魔の王國である。所謂

廓清を實現して此世を天國のやうにして初めて爾國を來らせ給へとの祈願が成就したわけなれば、廓清事業の前途は頗る遠遠であると云はねばならぬ。

家の中に於ても一家の風儀がわるく、一族互に相反目するやうなことであればこれ亦惡魔の國である。一家和睦して初めて我家に神の國が來るわけである。我儕の日用の糧を毎日興へ給へ……我儕の三字に眼を留て貰ひたい、單に自分一人のみならず、廣く我町村我國民一般が不自由なきやう、更に廣く云へば世界幾億の人類が不自由なき生活をなし得る様との祈禱である。故に産業なき人には産業を授け、貧病人のためには慈善病院を建てると云ふが如き事を含むので歐米にてはこの精神から社會事業も始まつたわけである。我儕が人の罪を赦す如く、我儕の罪をも免し給へ……これは道德實行の源かと思はれる。人は寛容の心を持つことが抑々徳に入るの門である。自分の罪過は之を棚に上げ、人の罪は責め立つると云ふことでは道德は身に行へない。古人が秋霜以自身肅、春風以接人と教えられたのは我身を處するには頗る嚴格て人に



對した時は恰も春風のそよ／＼吹くやうにあれとの意である。所が今日の我々はその反對で、いつも己が身を愛するに厚く人に對しては極めて冷酷なやうである。基督は先づ私の兄弟の罪過は寛容しますから、私の罪もお見逃しを願ひたいと祈れとの世にも有難い祈禱をお教えなされたことである。其次は我儕を試探に遇はせず、惡より拯出し給へ。……吾人の周圍には誘惑が満ち満ちてある。恰もマツチの箱をもつて火のそばにあるやうなものである。人間は火のつき易い情慾がある、嗜好があるので危い所に近か寄らないことが肝要である。米國では醜業婦の徘徊せる市街は、紳士は決して通らないことゝなつてゐる。禁酒家は酒屋に遠かり、禁煙者は烟草屋に遠かり、胃腸の不良な人は菓子店に近よらないのが上策である。不良少年が活動寫眞で自動車泥坊を見る。そうするとやつて見たくなる、先づ自転車の乗り逃げを演ずる、巡査が追跡する、遂に遁げのびる。それが面白いといふので今度は大膽にも自動車乗り逃げがして見度なる。何んと怖るべきとではなにか？。これは活動寫眞ばかりでな

い、萬事その通りである、上品な趣味の高い話はいが下品な低趣味のものは悪い。小人も大人も己が人格を卑うする様なものは避けねばならぬ。以上基督が祈禱の範として示されたことは、之れを實行すれば道德の如きは獨りて行へることゝなる。

諸君は世に道實の歌として傳えられてある「心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や護らむ」と云ふのに捉はれて祈禱の必要はないと主張する、かも知れない。私は度々大宰府に遊んだが後世の傳説かも知らないが彼處に天拜山と云ふがある、あれは道實が天を拜した所ではあるまいか。

私はやはり祈禱をする一人である、何となれば我をして反省せしめ且つ向上せしむるものは他にないからである。私は毎朝眞面目に謙遜に神よ愛の満てる心を以て今日一日私の務を全うし得るやう助け給へと祈るのである、そして夜寝るときは朝願ふたやうに實行せしや否やを省み、若し少しでも背いた所があれば、神にお詫をするのである。夫れて道實とは違ひ私は私の心が誠にかな

ふやうにと神に祈る。これが私の祈願である。茲に諸君と共に考へたいのは、人間が祈禱をなすことは其の天性であると云ふ點である。私共は我以上の力あるものに救ふて貰いたい、我より高い人格に接したいと云ふ心がある。

舜と云ふ人は聖人であつたが、父の瞽瞍は後妻の愛に溺れて弟の象を愛し、象は父と共に舜をば苦しめた、舜は昊天に父母に號哭したと録してある、これは舜が天に祈禱したことである。又勤王の士梅田雲濱が「妻臥病床兒叫飢、一身直欲拂戎夷、今朝死別兼生別、只在皇天皇土知」の詩を見るに、その結句は何を意味するであらうか。又明治天皇は日露戦役の時旅順が陥らずして幾千の武夫が打死するのを聞き召し、かくも多くの青年を殺してはならないとて深夜庭前に出て御祈願を遊ばされたといふことを洩れ聞いたことがある、私はその時非常の感に打たれた次第であつた。

尙ほその後

「とがあらば我れを罪せよ天津神民は我が身の生みし子なれば」と云ふ

御製を聞いては一層感を深うしたことであつた。

扱て諸君、熟々考へて見るに、吾人人間はどうも宗教性を生みつけられてあるやうである。宗教を信ずといふのはどうも、人間の天性のやうである。平穩無事なるときは祈らない、神佛を拜がまないが、一朝何か事あるときには必ず何か拜む、即ち祈願をする。所で何物に對して祈願するか、何物を拜むか、人間の性は拜む對象に似るやうになる。狐狸を拜めば狐狸の如くなる、荒ぶる神を拜すれば荒ら／＼しい性質となる、故に私の考へは祈禱心を養ふことは一番正しく、清く、且つ完全に近くなる源であると思ふ。私はあまり口廣い事をいふやうだが、十七の年から天の神に對し祈禱することを學び、爾來四十年の間朝夕祈禱を缺かしたことはない。何は兎もあれ眞の神に祈禱すれば心が眞實になることだけは確かである。近江聖人中江藤樹は

「皆人の祈る社に神もなし心の底に神やまします」

と歌はれた、恐らくは當時の人々の不眞面目を戒めたものであらう、基督は「心

の清き者は福なり」と仰せられた。

心の底に神を見ることを得るのはこれは我心の至誠が天地宇宙の神の心に通ふからである。若し祈禱に神なる對象がなければ祈禱は壁訴ゑである。祈禱なるものは幾千年間も誠ある人々が實驗して來て居るから疑はずして神前に祈るがよい。吾人の謂ふ所の祈禱が斯く正しき者であれば諸君兎も角も速に祈禱を始められんことを望む、蓋し實驗によつて祈禱の眞價は分るものである。

## 第七講 更生論

何れの宗教、又何れの倫理でも一面は對人的なもので、人間を改善發達せしむることが其主眼である。而して其目的を遂ぐるには罪惡の悔ひ改めとか、懺悔とか解脱とかいふことを實行させて居る。

基督教では約翰傳三章にかういふことが書いてある。猶太の學者で、而も七十子會議の議員であつたニコデモが基督を訪問して、何か天來の神秘でも聞きたい積りて、先生は天より來れる御方と推測すると切出した時に、基督は之れに向つて、人若し新に生れずば神の國を見ること能はずと仰せられた。即ち人の性は元は善なるものであらうが、生來自己の慾念の爲めや、周圍の惡感化の爲めに罪の子となつて居る人間は、多少の改善改作を加えた位のことでは到底眞正の人格者とはなり難いので、基督は茲に更生を高調されたのである。使徒パウロも羅馬書の六章一乃至七に基督の聖意を憧憬してかういふことをいつて居る。

「我儕その死に各バプテスマに由て彼と同一に葬らるゝはキリスト父の榮に由て死より甦されし如く我儕も新き生命に行べき爲なり」と。

偕て更生とは果して何を意味するであらうか、人間の生付いた性質までが一變するといふ意味であらうか、或は甦生の目的が一變するといふ意味であらうか。前者に就ては全然一變しないとは言ひ難きも、多少變化することは往々目撃する所である。例へば痲癩の強い質の人が變じて忍耐強い人となることもある。又酒癖に悩める人が一變して禁酒家となることもある。さりながら性の傾向は依然として存するので、幾何の油斷があれば、忽ちにして元の性癖が頭を擡げて來ることを見る。後者に就ては基督以來今日に至るまで、吾人は非常な感謝を以て其實現を見ることである。例へば自己中心の人があつて、萬事萬端悉く其點から割出して、苟も己が爲めにならないこととあれば、縦のものを横にもしない人が、更生の結果、全く其反對の性格となつて、何事に於ても己れよりも他を先にすることゝなる。又物質主義の人であつて、名譽なり、利達なり、地上

生活に囚はれて居たものが更生して神又は基督に對して忠誠を擡んずる精神となりて、地上にありながら恰も天上生活を營むものゝ如くなることがある。

或は又朝に夕に論争を事として、四隣の人に厭はれ、妻子にまでも忌まれる質の人が、更生して全く善隣を主とし、多くの人々に尊敬され、家庭の愛を一身にあつひるやうなこともある。要するに更生とは暗黒を出て、光明に着き、不義を離れて正道に歸し、不善を脱して善徳に入り、死より生に移るやうなものである。

諸君の中には、理想としては更生は實に間然する所がないが、今日の如く人情輕薄、風儀紊亂の世の中に於て、さういふ理想の實現を望み得べきかを疑ふ人があるかも知れないが、私の見る所又は實驗する所に由れば、人間は何時の時代でも殆んど同一の經驗を辿るものであつて、更生を要しないやうな人は十萬人に一人、或は五十萬人に三人位あるかも知れないが、先づそれも難かしいかも知れない。北米合衆國の人間の中で、更生を要しなかつた人といへばエマーソン一人だといつた人があるが、若しそれが事實であるとすれば、幾千萬の人間の中で

只一人といふことになる。時代がどうのかうのといふ議論は殆んど耳を藉す  
價值がないやうである。先づ人間は皆悉く更生を要すると見る方が妥當であ  
ると思ふ。して見ると、現代人も如何に墮落して居るとはいへ、之れをポーロ時  
代の羅馬人或は歐羅巴の中世紀の人間に比すれば強ち悪いにきまつて居ない。  
吾人は現代人を更生せしめたいといふので、過去四十年間基督の福音宣傳に熱  
中して居るやうな次第である。如何にすれば更生が能るかといふのが問題で  
あるが、先づそれよりも之に先つて、茲に更生の事實を挙げた方が諸君をして首  
肯せしむる捷徑であるかと思ふ。早い話が歐羅巴を改善するに、四大人格があ  
つたと古來言ひ傳へて居る。その四大人格と數へらるゝ者は何れも皆基督に  
依て更生した人であるが、これは實に私の議論を裏書する所の屈強の史料であ  
る。第一に數ふべきは先から繰返して居る使徒ポーロである。第二はオーゴ  
スチン、第三はローヨラ、第四はルーテルである。以上は「基督の救」てふ題下  
に論じて置いたから茲には言はぬ。

其他大小の差はあつても、之れに類する更生者は幾百萬あるか殆んど枚擧す  
る能はざることである。例へばメンヂストの開祖ウエスリー兄弟及びホイッ  
トフキルドの三人が世に出て、其體得した真理を提げて更生の事を高調する  
や、従來の罪惡を悔改めて斯教に歸依せし者は幾十萬人あつたか知れない。前  
世紀の後半に於ては彼のムーデー、サンキーが米國より英國に渡航して同じく  
數へ切れない程の更生者を起して居る。我國でも基督教が渡來して以來茲に  
六十年、此間天來の靈力に觸れて更生したものは幾千人あるか知れない。私が  
交際し或は我教會に於て養成せる信者の中にもさういふ更生者を多數有して  
居る。其中最も顯著なのは、男姓中には曾ては大罪を犯して監獄に投せられ、獄  
中にて斯教の真理を幾何か體得し、出獄後進んで斯教の根本義を學ぶと共に、愈  
自己の罪惡を認識し、イエス基督を己が救主と仰ぐに非ざれば到底救はるべか  
らざるを悟て、幡然悔改して、新たに造られたる人の如くなり、爾來今日に至るま  
で、一方己が事業を築きあげると共に、他方には斯教の爲めに心身を靖献して盡

瘁して居る者もある。又女性にして我國の素封家に人となり、妙齡にして某富豪の妻となり、維新の變に會て其家産が傾いた時、奮然起つて事業を經營し、男子も及ばざる程の勢力を振ふて茲に大なる富を致し、其後教育事業等に大に奔走し、漸く天下に其名を知らるゝ様になり、斯くして功成り名遂げたので、天下恐るべき者なしといふ勢で突進し、女性は云ふに及ばず、男性までも往々叱り飛ばさるゝといふ有様であつた人がある。然るに一朝基督の人格に接し、其背後に天地宇宙の神あるを知り、進んで神の人とならんと欲するや、自己の罪惡の甚大なるを、又如何に己が暴慢であつたかを自覺して、天下廣しと雖も身を置く所がない程の感に驅られて、茲に悔改めて洗禮を領すると、なつた。此女性の悔改前の生涯を知れる者にして、今その藹然たる風采に接せんか、基督教が實現せる更生の事實を認めて感佩せざる者はない位である。又一人の青年は同じく傲然として、天下己れと比肩すべきものはないといふて居たが、二人の友人と箱根の峠を登りかけた時に、其中の一人が、其傲慢なる青年に向て君は野心があるやと

問ふた時に、吾に野心なしと答へた。所が君にして野心なしとは信せられないと突込まれた。そこで其青年は箱根の峻坂を攀ぢつゝ、吾に罪ありやなしやと猛省して、箱根八里は夢の間に過ぎ、三島を越えて静岡に一泊し、更に腕車を賃して宇都の谷峠にかゝらんとする時に、眞に自己の野心に充ち居る事や、傲慢なりし事や、過去の罪惡を今更の如く感じて、思はず腕車の上で神よ願はくば我が罪を赦し給へと熱禱を捧ぐると共に、さきの慢心は消え失せて全く謙遜の態度になり、爾來今日に至る三十有餘年の間、修養に孜々として怠らないといふが、是即ち更生でなくて何であらう如斯例は僕を更ふるも盡きない程であるから、先づ此位で筆を止めて置く。

基督教といつても、天主教や希臘教に於ては更生の事を力説しないやうであるが、新教に於ては其大部分は大に更生を高調して、更生の實驗を経たる者でなくしては洗禮を授けない方針を採つて居るやうである。吾人も我日本國民を改善改良するといふやうな姑息なやり方でなく、此方針を以て根本的に個々各自

が罪惡の生涯より更生し新たなる生活に入るに到らしめんとその精神を以て立て居る次第である。

### 第八講 信徳並行

私は始終あちこち旅行することであるが、嘗て松島附近を通過するので鳥渡松島見物に出懸けた。初は小舟で群島の間を縫ふて廻つたが、これが日本三景の一といふ感は起らなかつた。何となれば海水は濁てある上に藻が生えてあるし、全體の景が盆栽的であつたからである。夫れから十年後再び松島に行つたが、今度はすつと海の方に突出てある山に登つて見た、ヤアこれは絶景であると叫んだ。此處から見ると松島の全景が眼下に見ゆるばかりでなく、陸の方には七つの山々が雲際に聳えてあつて、實に雄大な眺めである。初め松島を見たときは背景がなかつたから引立たなかつた。此度は背景を置いてこれを見たのでこんなに見榮えがある。

吾人の道徳にも背景が必要である。孔子の教即ち儒教は坦々たる道を歩くが如く背景に乏しい感がある。君に忠に、親に孝に、夫婦相和し、長幼序を守る位

なことは常識を備えた者は皆知つて居る。此平々たる坦道の教にも一つの背景があつたならば、趣をなすであらう。背景とは前講演の人生觀である。も一つ簡単に申せば背景に宗教が欲しい。宗教抜きは道徳はどうもつまらない。明治の初年以來文部省では官公立の學校で、宗教抜きは修身を教へさせたばかりでなく、宗教學校にも同一の方針を取らしめやうとした。其結果は如何かといふと、卒業者に道徳心が薄く素行が修らず、人格が卑しいと云ふてはないか。近頃に至ては、文部省も道徳の背景に宗教が欲しい様な傾向を現して來た。私共の主張は宗教と道徳とは決して離るべき性質のものではない。ところが又宗教にも道徳抜きは宗教がある。大阪附近ではよく大師詣りといふのが盛んに行はれるが、これは全く道徳抜きは宗教のやうである。世界で一番宗教の盛んな所は露西亞である。日曜日などは軍人までも三々五々會堂に集るが、其歸りには盜をなすやうなものもあると云ふ評がある。蓋し露西亞の宗教は道徳抜きは宗教だと云ふが果してさうであらうか。凡て宗教といふものは道徳實行

の動力でなくてはならぬ。機械場で仕事をするには何か動力が必要である人間にも裏に動力があつて初めて道徳といふ機械が廻ることとなる。私は諸君に雅各書第二章第十四節以下をお讀み願ひたい。曰く「わが兄弟よ人自ら信仰ありと云て若し行なくば何の益あらん乎その信仰いかて彼を救ひ得んやもし兄弟あるひは姉妹裸體にて日用の糧に乏しからんに爾曹のうち或人これに曰て安全にして往け願くば爾曹温かにして飽ことを得よと而して其身體に無てならぬ物を之に予すば何の益あらん乎此の如く信仰もし行を兼ざるときは乃ち死るなり或人いはん爾信仰あり我行あり請なんぢが行を兼ざる信仰を我に示せ我は我が行に由て我が信仰を爾に示ん」と、人は只口先ばかりでは可けない。信仰は實行を兼ねばならぬ、實行といふことがなかつたならば、其信仰は死んで仕舞ふ、換言すれば、信仰に徳義の念が抜けてゐては駄目である。車は兩輪、鳥は兩翼があつて飛走が出来るではないか、丁度其の如く信仰と實行と相伴ふて初めて立派な人格が成立する譯である。



基督教の信仰とは何を意味するか、神を天父と仰ぐところから人は皆兄弟である。そこをよく考へて見るべきである。我徳川時代では人を見れば敵と思へど教へた。明治の世となつては人を見れば泥坊と思へといふことになつた。汽車に乗れば隣席の人を泥坊と思ひ、宿屋に着けば下女を泥坊と觀じ、工場て人を使ふにも若しや時間泥坊はないかと鶴の眼鷹の眼で監督をなす。かくの如くして道徳が行はれやうか。泥坊は出来ても道徳は行はれるものではない。之に反して人は皆兄弟だと思ふことになれば、兄弟に對しては親愛の情が先に立つので自ら道徳は行はれる。兄から金を借るとも證文の必要はない。弟に山ほど荷物を預けても受領證は要求しない。世界の中で一番心持のよい國は英國である。何んとなれば彼國では凡ての人を兄弟扱ひにすることである。又無暗に人を疑はない、銀行などで金を預けたとて受取は呉れない。時計を買ふても二百圓のものを月賦で初め五圓入るれば直ぐに品物を渡して呉れる、人は皆兄弟であるから悪い事はするものでないとの信用がある。偶信用を害

ふ者があれば社會に立たれないこととなる。日本人では人は凡て泥坊と思ふて初めから信じないでかゝる。他人交際の世の中では道徳が行はれやう筈がない。天の神は父である、世界は家庭である、子が父母に仕へるには友人の制裁も要らぬ。兄弟仲睦くするならば道徳は自然に行はれる。それで基督教ではやれ忠だの、やれ孝だのと振舞はさなくても自然之が實現を見ることが出来る。私の家では子供は決して叱責しない。日曜などには勧めないけれども子供は獨りて日曜學校に行く、勧めないけれども聖書も讀めば祈禱もする。道徳のとは書いたものでは行はれない。實行して見せねばならぬ。信念ある人達が實行して範を示したならば、自然他に及ぼして世界は終に一新せらるゝであらう。偕て諸君、今日の文明は物質的進歩の絶頂に達し、空前の文明と稱すべきである。此文明の爲めに幾多の劣等な宗教は衰退して居るが、不思議にも基督教のみは今尚ほ依然として此文明の間に信奉されて居る。或人は基督教も衰へたと評するが、國によつてはさう云ふ衰狀を呈して居る。實の所は昔は否でも應

でも教會に往かねばならなかつたので、日曜日の禮拜は賑ふた様だが、今は往くも自由、往かざるも自由なので教會に出席する人員は減じた所もある。今日は宗教は寺院の中に籠居せずして實社會に活動することゝなつてある。して見ると基督教は今も尙ほ盛んに信仰せられて居る。何故他の宗教が衰退しつゝある時に、獨り基督教のみが依然として行はれて居るか、其理由は基督教の經文は極く簡單である。而も主意が甚だ明瞭である。佛書などは馬につけて七駄半もあるといふことであるが、基督教の聖書は片手に持つほどしかない。而も其全部六十六卷を読むのが嫌であれば、馬太傳の五、六、七の三章のみを讀てもよい。夫れでもまだ多いといふ事であれば、天の父よ云々の所のみ讀む丈けてもよい。道徳上の根本真理はチャンと其中に含まれてある。これ近時尙ほ歐洲諸國に基督教が行はるゝ所以である。基督教でなければならぬと歐米人が力を入れる理由は茲に存することを認めねばならぬ。

序であるから茲に一言したいことは、何故に我日本に基督教を弘布せんと欲

するかといふ理由である。元來我民族の間に四つの病根がある。之れを在來の宗教で治すことが出来るなれば、何も新來の基督教を人々に憎まれながら弘布するには及ばない。所が在來の宗教では癒りさうにないので、敢て奮然決然傳道に身を委ぬる次第である。然らば、其四大病根とは何ぞやといへば、第一は虚偽、日本人ほど虚言つきの國民は何處にあらう。歐米には恐らくあるまい。日本人の偽は今に初まつたことではないが、今日は一層甚しくなつたやうである。かういふ虚偽が民間丈けであるといふならば、まだしも政府までがやる。お互に交際上にも虚言がある。お隣の女房さんに今晚は何處其處に基督教の修身講話があるが聴きにおいでになりませぬかと云へば、聴くのは嫌だから嫌といへばよいのに、今晚は聴きに行きたいけれども病人があるからとか、お腹が痛いとか、虚言をいつて斷る。それで世界の人からは日本人は虚言つきだといはれて居る。熊本の人で代議士をして居た佐々友房といふ人が、歐米漫遊から歸つての話に、歐米と我日本との異なる所は日本人にも稀に誠實な人があつて、

英米人にもたまには虚言をつく人があるといった。これは深く考へれば堪らない酷評である。それは日本人は皆虚言家、稀には眞實な人もある、歐洲人は皆誠實で、稀に虚言家があるといふことになるからである。基督教者にも虚言つきは偶にはないでもないが、一體虚言にも白虚と黒虚とがある。子供がセメン圓をどうしても服まぬ時、砂糖に混せて服ませる、これは白虚言である。黒虚言は天下許すべからざる大罪である。此黒虚言つきは基督教信者には至つて少いと思ふ。何故基督教では虚言を絶やすことが出来るかといふに、天の神を信するからである。天の神は虚偽を許し給はない。第二は虚榮心、日本人は非常に虚榮心が強い、見榮坊である。家でも一雨降ると直ぐに剝けるにも拘はらず壁など見場のよいことをする、まるでお菓子細工みたやうである。私共はこんなことは大嫌ひである。それで教會堂を建るにしても體裁ばかりよくて直ぐ毀れるやうなとはやらぬ。壁など杉の焼板を打附けて置く。それで二十五年にもなるけれども、大阪教會の會堂はまだ丈夫である。然らば此虚榮心は如何に

せば退治るとが出来るか、これはいふまでもなく心の底までも見透し給ふ神を信するより外に途はない。神の前には表裏がない。彼の英人が堅實な氣風は何に原因するかを調査して見給へ、之には淵源がある。數百年間見ざる所なき活ける神を信じ來たといふ高尚な素養があることを忘れてはならぬ。第三は、誠實を缺く、即ち不眞面目などである。嘗て某子爵が朝鮮への行掛け、大阪に立寄られたとがある。其時のお話の中にどうも日本人にはあきれれる。旅順が陥落したと云つては酒を飲む。提灯行列をやる。飲めや歌への大騒ぎをして居る。旅順はどうして陥落したのであるか、實に幾百の青年が血を流し屍を原野に曝した結果なることを思はない。之を思は、陽氣に飲めよ騒げよの代りに、其父兄や遺族に對し、謹んで吊ひもし、感謝もしなければならぬ譯である云々。今日は日露戰爭當時に比すれば層一層不眞面目な空氣が上下に充盈してある様に思はれる。之も恭敬以て活神に事ふるといふ信仰によらざれば改新の見込は立たないことである。第四は、淫靡な風習である。嘗て織田信長が天主教宣教師に向

つて妾を置くことを許すや否やを質したとがあるが、斷じて許さないとの答を得て、それでは吾は基督信者になれない、否ならないと云つたさうである。これは天主教も希臘教も新教も均しく唱道する所であつて、一夫一婦は斯教の生命である。隨て奸淫は勿論不倫の行爲は大罪惡として懲罰するところとなつてある。

元來日本は風光明媚の國であり、風氣清潔な國であると外人に謳はれたが、此頃は「障子の蔭の日本」又「暖簾の奥の日本」といふ様な書物も出來て盛んに我國が賣淫國たる事を紹介し批評して居る。如何にせば之を防ぎ止めることが能きるか。之はどうしても一夫一婦主義の基督教倫理を弘布するの外はない。終りに臨んで一言するが、基督教は信仰と道徳と並行の教で、尙ほ車の兩輪、鳥の双翼の如きものであるといふことを耳底に留められんことを希望する。又此信德並行に就ては雅各書二の十四以下を熟讀翫味されんことを望む。

### 第九講 新約書の編纂史

「新約書の編纂」と云ふ題目は一寸誤まり易い題目である、日露戦争史又は明治の歴史を編纂するとすれば編纂委員が出來て、或は三年計畫或は五年計畫で脱稿すると云ふ事になるのであるが新約全書は斯くして編纂されたものではない、實は作つたものではない成長したものである。

新約書の中に度々聖書と云ふ語があるが、それは他ではなく舊約聖書の事である。又法律と豫言と云ふ字が使つてあるが、是も亦舊約聖書の事である。其法律とか豫言とか又は聖書とか云ふ字を使ふた時には、ユダヤ人が舊約聖書を重んずる事は恰も私共日本人が勅語を重んずると同じやうな事であつた。或はそれ以上であつたかも知れない。イエスの時代には彼地此地に會堂と云ふのがあつて、其會堂には舊約聖書が小羊の革にて作られた巻物になつて居つた。それは會堂の司と云ふがあつて管理して居つた。路加傳四章を讀んでみると

イエスが常時の如く會堂に出席し、何か讀まうとして御立ちになられた時、管理の者が以賽亞書を御渡ししたと録してある。

扱基督は舊約の法律とか豫言とか云ふ者をどう御覽になつたかと云へば、無論之に對しては非常なる尊敬を拂はれた者である。ユダヤ人に劣らざる尊敬を拂はれたが其解釋は舊習舊例に據らず、基督獨得の見識を以て思ひ切つた解釋を試みられた。其事は馬太傳第五章二十一乃至四十八を見れば明白である。古の人に告げて云々然れど我爾曹に告ん云々として非常なる權威を以て自己の意見をお示しになつたことに御注意を願ひたい。實に基督の語は非常に權威があつた、舊約聖書と同等若くは其以上であつたかも知れない。併しイエスの在世中は其人格に信賴して居つたので、語類の方は誰も左程には思はなかつたが其死後に至つては信賴して居つた御人格が見えなくなつた爲に、弟子等は勿論道に志す人々は基督の語録又は話が聞きたくなつて來た。ソコデ基督の語とし云へば片言隻語と雖も尊重するやうになつたのである。之は獨り基督ばかりでなく弟子方も同様の譯であつてペテロなり、ヨハネなり、ポーロなりが此世に生きて居る時には、別に其説教や書物に重きを置かなかつたが、死後に至つて大事に保存さるゝこととなり其重なるものは今尙ほ新約書中に掲載されてある。茲に考へてみたい事は、どう云う順序で新約書が成長したかと云ふ事である。イエスの傳記としては御承知の如く、其觀福音書と約翰傳の四書がある。其觀福音書と云ふのは馬太、馬可、路加の三傳であるが其材料に共通なのが、多い所からかく名づけたものである。その中で最も早く書かれたのは馬可傳であるが先づ紀元四十四年頃の作であらう、一説には紀元五十五年頃ともある。今私共が用ゐて居る馬可傳の前にウルマークと云ふ馬可傳の種本があつたと云ふことである。果して然うであるとすれば、今の馬可傳はそう早く書かれたものにはあるまい。多分馬可傳の種本であるウルマークが四十四年頃に書かれたものであらう。實は此馬可傳も作られたのではなく寧ろ成長したものである。御承知の如くペテロが彼地此地を巡廻つて、イエスの逸話やその語録を基礎と

して説教した時に、馬可が通譯をしたと云ふことである。それらを材料としてそれにイエスの語録と、何か外の材料を加えて馬可傳を書いたものと思はる。

次に成長したのが馬太傳である。是も早い説を主張する人は紀元五十年と云ひ一般には六十年頃と信せられてある。馬太傳は馬可傳とイエスの御語録とを基礎として馬太と云ふ弟子が書いたものである。

次は路可傳である。是は早い説をなす人は、紀元五十六年から五十八年迄の間に出来たものと云ひ、一般には六十年より遅くはなからうと云ふことになつてある。路可傳は、馬可傳、イエスの語録、馬太傳も參酌したかと思はるゝ節がある。及びペリヤ傳道の記の三者を材料として居る。ペリヤ傳道記の重なるものは十章の二十五乃至三十節の「善きサマリヤ人」十五章の「放蕩息子」二十章十九節以下の「ラザロ」と富める人の比喩である。

最後に出来たのが、約翰傳であるが、その何時出来たと云ふ事に付いては、議論百出で、まだ纏つた一定の説はないやうである。先づ早い説は、紀元八十年と云

ひ、遅い説は、紀元百三十年と稱して居る。本傳の内容は、共觀福音書と對照する時は、非常の相違點がある。記述の目的は、イエスが神の子であると云ふ事を證明するにあつて、傳記と云ふよりも論文と云ふ方が適當な様に思はる。共觀福音書はどちらかと云へば理解し易い方であるが、本傳は、多少哲學的の素養ある人でなくては悟れないやうな文字が羅列してある。併しソコが本傳の價値の存する所である。扱其記者に就いては種々な臆説があるが、先づヨハネの集めた資料やその説を基として第二世紀の始めに誰れかが書いたものであらうと云ふ事は、學者間にては略認められてある。

其次に出来たものは使徒行傳である。是は多分紀元七十年頃、エルサレム城が未だ滅びない内に出来たものであらう。本傳の屈竟な材料は路可傳記者ルカの日誌である。それは書中アチコチに「我儕」と云ふ文字が用ゐてある部分を見れば分る。御承知の如く、エルサレムにイエスの弟のヤコブと云ふがあつて、監督として羽振を利かして居り、ポローはアンテオケを中心として地中海

の廻りに道を傳へたのである。そこでヤコブ派とポーロ派との間に事情の異なる所から多少行違を生じ、爲めに反目したともあつた。かゝる事情が天下後世に傳はつては基督教の名折れてあると云ふので、本傳の記者はこれを調和させるために十五章にはエルサレム會議の事を記し、双方全く調和が出来たと云ふことを示めて居る。其他は多くは書翰であるが、教會宛のものもあれば個人宛のものもある。私共は之を讀んで當時の事情が手に取るやうに明かに分るばかりでなく、大教訓を受けることもあり、又今昔の感に堪えないやうなこともある。書翰中で一番早く書かれたものは雅各書である。是は早い説を主張する人は紀元四十四年と云つて居る。

ポーロの十三通の書翰の中で最も早く書かれたのは、帖撒羅尼迦前書である。是が紀元五十年、帖撒羅尼迦後書は其翌年、即ち紀元五十一年の記述である。次が加拉太書で、之が五十年か五十一年、其次が哥林多前書で多分五十五年、其後書が五十六年頃の作と思はる。其次は、幽囚書翰と云つてポーロが、カイザリヤに

二年の間囚はれて居つた時か、又は羅馬に三年許り幽閉されて居つた時の獄中の作なので、かく名づけたものである。それは以弗所、腓利比、哥羅西と云ふ三書である。時代はよく判らないが、五十六年から六十一年迄の間の作であらう、新約書中でポーロの書翰の第一に掲げてある。羅馬書は最後に書かれたものである、多分紀元五十九年頃の作であらう。羅馬にポーロが出かける前に、本書を送つたと云ふから、五十八年か五十九年と見るべきであらう。

次に牧會書翰と云ふのがある。それは提摩太前後書及提多書である。是は私が牧師、執事の必讀書であらうと稱する所の良書である。著作の年代は判然云ふことは出来ない。其他に彼得前後書とか約翰書とか種々あるが、くゞしいからこれは省略して、新約聖書の最後に掲げてある黙示録の事を一言して見たい。

本書は凡そ紀元七十年頃の作と云ふのが當らずと雖遠からざる説であらう。約翰傳よりも餘程早く書かれたものである。此黙示録と云ふ書物は何度讀ん

でも解らないと云ふ人がある。解らないのが當然である。何となれば、當時羅馬帝王の爲に基督信者が大迫害を受けて居つたので、これらを勵ます爲に書かれた書物である。それを表面に現せば直に取りあげられるか、或は焼れて了ふので、隠語又は比喩が多く用ゐてある。これ即ち當時の團々珍開みた様なものである。當時の人が讀めば頗る感興に富んだ書物で且つ慰藉に満ちたものであつたらう。然るに二千年後の私共が讀てみると、一讀したゞけては解らないが、當時の事情と本書の目的を知て讀めば非常に面白い本である。斯う云ふ様に新約書二十七卷が出来上り、聖書として教會で朗讀されるやうになつたのである。扱どう云ふ譯で此二十七卷が選ばれて、茲に新約書が成立したかと云ふのが今晚の問題である。是から本問題に就いて考へて見ることゝしよう。

舊約全書がユダヤ人の會堂で朗讀されるやうな意味に於て、新約全書が聖書として朗讀されるやうにはどうしてなつたものか、是は先にも御話した如く基督が、此世を御去りなされて後に、その語録や弟子方の隨筆や書翰を尊重する所

から當時の智者學者及び教會の牧師達が靜かに研究翫味する中に、是は實に偉い書物である、眞に是は神の言葉である、是ならば、多くの信者の集れる席上に於て朗讀しても宜からうと云ふ事になつたものと思はる。先づ基督の言行録とも云ふべき共觀福音書が教會で讀まれることとなり、次にポロやヤコブの書翰の如きものも讀まれることゝなつたであらう。中には讀んでは不可なと言はれた書物もある。新約書二十七卷の外に經外書と云ふがあるが頗る有益な書である。併し多くは齊東野人の語で一顧の價もない。所が茲に三十年以前に發見された十二使徒の教訓と云ふのがある。此教訓の中には主の祈禱もあり、信者を待遇する心得もあり、有益な参考書である。其内容の一を申せば當時吾も信者で御座る、吾も信者で御座ると云つて、信者の家を食ひ荒しに来る人間が澤山あつたので、「三日の間は御客にして泊めてやるが可い、三日以上逗留するならば、勞働をなさしめよ」とある。信者なれば喜んで勞作に従事するが、そうでない人は逃げ出すこととなるので、これは信者であるか否かを試めして見る



試金石であつた。

次に「ヘブル」の福音書と云ふのがあつた。是は殆ど共観福音書に匹敵すべき良書である。次に千八百九十二年に「ベテロの黙示録」と云ふものが発見されたが、是も有名な書物である。それからクレメンスがコリント人に贈つた書物がある、それは愛の事に付ては殆ど哥林多前書の十三章に劣らない深いものがある。併し本書中何んとか云ふ一つの鳥があつて、それが五百年生きて居たと云ふ事が書いてある、即ち迷信の記事が加はつてある、一の迷信があつた爲に是は新約聖書の中に入れられなかつたかと思はる。さて其二十七卷は誰が選だと云ふのでもなく、又何かの會議で此二十七冊に決したと云ふでもなく、出来るに従つて、教會で段々讀んで見て、所謂据りの良いのは新約全書の中に入れて居るものゝ讀んでみると、何れも据りが良いが、其中でも彼得後書の如きは大分据りが悪い所がある様思はる、昔の人々も仍り据りが悪いと思つたやうで

ある。ヘブル書の如きも、昔の人は据りが悪い所があるやうに思ふたやうだが、今はそうでない。

抑も新約聖書と人々に仰がれる様になつた事に就ては、百八十年から二百年迄に見逃す事の出来ない三人の大家がある、一人はアイリニオスと云ふ人である、彼は世界に東西南北が有る如くに基督の傳にも馬太、馬可、路加、約翰の四書があるのは當然であると云つたやうである、他はトルトリヤンとクレメントである。以上の三人は舊約聖書の語句が新約書に引用してある如く、各々の著述の中に新約全書を權威あるものとして引いて居る。前にお話したクレメントは使徒行傳第二十章の三十五節を引いて居る。又紀元百十年にアントニオ、マグネシユースと云ふ人は幾らも書翰を遺して居るが、馬太傳、約翰傳、ポーロの書翰は確かに讀んで居つたと云ふ事が其記事に現はれて居ると云ふとである。それから紀元九十八年にバルナバと云ふ人があつて、其著書の中に、「召さるる者は多しと雖も撰ばるる者は少なし」と云ふ聖書の句を引いて居る、茲に一つ見

逃す事の出来ないのは紀元百三十年から百四十年迄の間に居つた人で、ペピヤスと云ふ人物の事である。此人はイエスの二人の弟子に従つて教を聞いたと云ふことである。即ちイエスの又弟子であるそのペピヤスは「イエスの託宣の説」と云ふ書物を著した事がある。百五十年から百六十年になるとテシヤンと云ふ人があつた。テシヤンの「四福音書の調和」と云ふ書がある。紀元百四十年にマルシオンと云ふ人があつた。此人は基督教に對して。反對の態度を採つた人であるが、此人は路可傳のみを取り、馬太傳、馬可傳、約翰傳も排斥して居る。彼が新約書の中で是は宜しいと云つて採用したのは路可傳とポーロの書翰十通である。

話は飛ぶが紀元千七百四十年に伊太利のミラノ圖書館の主任をして居つたアントニオ、ムラトニオと云ふ人が圖書館を漁つて居る時に、新約全書の目録やうのものを發見した。此目録は第七世紀か第八世紀頃のもので、羅典語で書いてある、ところが此羅典語で書いてあるのは翻譯であつて、その原本はヘブル語

である、そのヘブル語の原本は第二世紀の終りの頃に羅馬の都で出來たものと鑑定である。そうするとムラトニオが千七百四十年に伊太利のミラノの圖書館で發見した新約全書の目録様のもは、第二世紀の終りの頃に作られたものであつて、第二世紀の終りには整然と新約全書が今の體裁になつて居つたとが明かである。尤も少し順序が違つて居る、馬可傳が初めになつてあるが、前半は散逸した者か、馬可傳の終りから始まつて、路加と約翰となり、そして四福音の現はれた紀元が書いてある。それから使徒行傳がその次になり、其後にポーロの書翰の順序が今の新約とは違ひ、一、哥林多書、二、以弗所書、三、腓利比書、四、哥羅西書、五、加拉太書、六、帖撒羅尼迦書、七、羅馬書である。前に年代の話をした時も羅馬書が一番後だと云つたことを御記憶を願ひたいのである。それから腓利門、牧會書翰其の外に今の新約全書にはないが、ラオデキヤのアレキサンドリヤに贈られた書翰があるが、この二通は偽作と斷つてある。

それからユダヤ書と云ふのに二つの書がある、多分第二と第三だらうと云ふ

とてある。又ヨハネとペテロの目録と云ふのがある。私共も今日ヨハネとボロの目録は承認するが、是等は教會で朗讀しないものと主張する人があると附加してある。斯う云ふ様にして成長發達して新約全書が出来たのである。さうして私が度々繰返した如く据りが善いものばかり新約全書と爲して、据りの悪いものは皆省かれて、而かもムラトニオが発見した目録にはラオデキヤのアレキサンドリヤに贈つた手紙を入れてあるが、偽作と云ふのであるから、入れる必要がないから抜いてある。ヨハネとペテロの目録は承認するが、ペテロのは放棄したので、その放棄したのを誰か、近頃発見したと云ふ事になつて居るが、その必要のものが入れられて必要でないと思つたものが省かれたのであるから、此中てヤコブの手紙や目録は多少据りが悪いと見ても、經外書として省かれたものとは比べると云ふと、矢張り充分の價值のある書物であると云ふ事は認められた、況んや昔から据りの善いとして此中に入れられただけのものは、それは眞個に立派なものである。

最後に一寸一言したい事は、新約全書は何れの會議に於ても此二十七卷に限ると決議された事はないと云ふ話をしたことである。すつと後になつて紀元六百九十一年に開かれた「クイキセツキスト、カオンシルグス」と云ふ會議があつた、その會議で此二十七卷は聖書であると云ふ事を決められたと云ふが、其の決まつた後に決められたと云ふのであるから、その決めた事は別に何等の價値もないのである。百五十年か二百年と云ふならば兎に角、紀元六百九十一年と云ふのであるから、賴朝時代の事を大正三年に平氏が負けて源氏が勝つたと云ふ事を決めたと云ふのと同じ事である。これは蛇足だが茲に附加して置く次第である。

## 第十講 會衆政治の大精神

基督が御昇天なされたる當時基督信者は十二の弟子、七十子、それに婦人及びイエスの兄弟をも加へて百二十人であつたと使徒行傳記者は録して居る。此百二十人は杖とも柱とも頼んで居つた主イエスにお別れしたので、非常に失望して到底成すあるに足らじと思つた。併しよく考えて見ると基督が建設せんとされたのは地上の王國でなく、靈的の王國であつた事を悟つて、前述の百二十人が一團となつて心を協せて常に祈禱を努めた。扱此祈禱會は何を生出したかと云へば高潔、純良、誠實の三徳であつた。實に祈禱を致した爲に誰が偉い者にならうかと云ふ様な卑しい心は蟬脱して、高潔なる思ひに満たされ、同輩を嫉むと云ふ様な邪心は消滅して純良なる思念に満たされ、至誠以て主の使命を果さんと欲するに至つた、茲に於て熱烈なる傳道精神が勃起したのである。基督御在世の間は弟子方の中に幾度か争ひがあつた。争ひの結果イスカリオテの

ユダは陰謀を企て、爲めに非命の死を遂げた。ところが主此世を去り給ふて後十一人の者は申すに及ばず、七十子も女達もイエスの兄弟までが協心戮力することゝなつた、即ち百二十人が一人の如くになつたと云ふ事である。これが會衆政治の大精神である。

成程いづれの教派の人々も祈禱はする。よく集つて祈禱會は開く、けれども天主教會に於ては父なる神と信者の間に法皇、カルジナリ、大監督、監督、長老と云ふやうな者が挟まつて、信者の爲に執成をしたり、或は代つて祈禱することもある。新教の大精神は神と人との間に何ものゝ介入をも許さない。一人一個の信者が進て神の聖前に直接にイエス、基督の名に依つて祈禱を捧ぐることとなつてある。殊に會衆政治の教會に於ては、百二十人が常に祈禱を努めたりと云ふ如く、一人々々が皆神の聖前に自ら祭司となり、或は己が爲に祈り、或は他人の爲に祈る事である。諸君の中に獨り靜かなる部屋に於て祈禱をされない方はないであらうが、會衆と共に心を協せて祈禱する事を怠つて居る人は尠くない

やうである。會衆と共に祈ると云ふところに非常な興味がある、一人々々聖前に祈ると云ふ事も無論缺く可らざる事であるが、信仰を同じうし、バプテスマを同じうし、主義を同じうし、我日本を双肩に擔ふて立たなければならぬと云ふ其使命、其責任を負ふ所の者が此所に集て祈禱をなすといふ事であれば、其祈禱會には必ず基督も在し、聖靈も在し、天の父も耳を傾け給ふことであらう。

かくの如き祈禱が古の百二十人を潔め、更に一致協力して熱心以て福音を傳へると云ふ、大精神を生出した如く、今も其精神を生出す事は私共の信じて疑はざるところである。若し基督教會に此精神なかりせば、到底教會は救世の大道を完うする事は出来ない。いまメソヂスト教會の起原を探ねて見ても、アメリカンボールドの起原を探ねて見ても、初め二三若くは三四の人々が心を協せて祈つたと云ふことに存してある。今我國に於て大活動を始めなければならぬと云ふ場合に當り、信者心を協せて祈禱する外はない。

次に失敗せるユダの代りは奈何にすべきやと云ふ問題が起つた、折角主イエ

スがイスラエルの十二族に擬して多くの弟子の中より、十二人を撰拔なされたのにユダは背いた、大失敗をなした。是非十二の數を満たさなければならぬと云ふので協議會が開かれた、茲に亦會衆政治の大精神が現れてある。十二弟子の高弟なるペテロが十一人の弟子に相談してユダの後任者を決めても、又ペテロ自身が進んでユダの後任者を選んでも、何人も故障は云はなかつたかも知れないが、聖靈はさうは指導されなかつた。使徒行傳一の十五に當時ペテロ弟子等(その集れるもの百二十人)の中に立つて云々と録してある。論議の要目はユダの後任者を選ばなければならぬ、誰にしやうか、誰が宜しからうかとのとであつた、會衆は熱誠熟考の末、七十子の中からバルサバと稱ふるヨセフ又の名はユストと云ふ人と、マツテアと云ふ人の二名を擧げた、兎も角も此二人を擧げた會衆政治の大精神は此所に存してある。それは外でない、信者一人一個の判断を重んずる點である。一人一個の判断を重ずる事は即ち其人々の人格を重ずると云ふ事になる。或は牧師なり執事なりが斯う云ふ事を決めたらから御同

意下さいと云つて手を擧げさせても事は纏るが、夫ては會衆政治の精神に背く譯である。一人一個の判断を重んずると云ふところから何うしたら宜からうか、如何にお考へになるか、何か御名案はあるまかと尋ねれば銘々熟考しなければならぬ、熟考の末思案をし考へもして多數を以て決める、其決めたところに神の聖意があると信じて、夫を決行する事になるのである。

右の如く一人一個の判断を聽いて之を定むる事になれば、其相談を掛けらるるところの者は、何事も自分の判断が加はつて居る事を自覺する、判断が加はつて居るとの自覺は、聽て責任の自覺を生み、其責任の自覺は、其人の人格を高うする譯である。私は事は違ふが熊本の洋學校で米國の軍人ゼンスと云ふ人に教育を受けたが、僅か十五六の子供であるのに先生は事大小となくお前は何う思ふか、お前の判断は何うであるかと尋ねられ、其尋ねらるゝ度毎に實は困つた、先生に何と答へて宜いか實は非常に困つた、けれども後になつて考へて見ると尋ねられた度毎に我智識が進み、我判断が健全になり、言換れば我人格が夫だけ大

きくなつたやうに自覺することである。其點が實に大切なるところである。アブラハム、リンコルンであつたと思ふが、亞米利加の共和政治を國民の政治、國民に依れる政治、國民の爲めの政治と註された。會衆政治は信者の政治、信者に依れる政治と云ふは即ち其點であらうと思ふ。

基督教會の政治では會衆政治が最も古いことは誰も異論のない所であらう、神の道が漸く地中海の四邊に傳はりいよいよ大々的に之を治めなければならぬと云ふ場合になつて來た所から大きな町の監督即ち牧師が附近の小なる教會の牧師を監督するようになった。紀元三百二十五年のニカヤの會議に於ては羅馬、アレキサンデリヤ、及びアンテオケの三監督の位置が高まつて來た、其後の會議に於ては君士坦丁堡の監督が加はり、第五世紀の頃になつては羅馬の監督と君士坦丁堡の監督とが非常に勢力を得て羅馬の方は法皇、君士坦丁堡の方はペトリアークと云ふ名を以て、神の教會を支配するようになったのである。

天主教、希臘教がさう云ふ工合に世界に蔓つて居つたが、今より四百幾十年前

にマーチン、ルーテルが起つて宗教の大改革を叫び、佛蘭西のカルヴキンが起つて大いに神學上の思想を革新し、茲にプロテスタント即ち抵抗教が破竹の勢を以て發展することゝなつた。話は後に戻るが、英國にロボルト、ブラオンと云ふ熱誠なる信者があつて、基督の教會は教會の教會でなくてはならぬ、教會の會員に依つて治める教會でなくてはならぬ、教會の爲めの教會でなくてはならぬと云ふ會衆政治の主義を唱え出した、それが紀元一千五百八十二年であつた。是が組合教會の濫觴である。さう云ふ主義を唱へたところが忽ちに大妨害が起つたので、此ブラオンの仲間は難を和蘭に避け、茲に八星霜を過したが、和蘭でも亦都合が悪いから、メーフラワーと云ふ船に乗つて遠く北米に渡り、ブリモスと云ふ岩の上に上陸して、大開墾に努め、傍ら教會の建設に努めた、これがかの會衆派の起源であつた。英國に残れる者はインデペンデントの名の下に會衆政治の教會を經營し來つたが二者ともに今はコングレグーシヨナリストと唱えて居る。會衆派と云ふ意味である。今日世界の表に於て我々と共に同じ主義を

以て立つところの會衆派の教會と云ふのが、一萬四千三百六十五ヶ所ある。又會員の數は百三十八萬三千三百七十六人と云ふ事になつてある。

此會衆政治の精神は政治上において北米合衆國や佛蘭西の共和政治となり、假令共和政治とならなくても英國の如き純然たる會衆政治の國もある。我日本に於て今日憲法が發布せられて此所に立憲政治が行はるゝやうになつて來たのは何であるかと云へば、ロボルト、ブラオンが唱へたところの會衆政治の現はれてあると云つても決して誣言ではあるまい。

(附錄) 基督教問答



# 基督教問答

## 第一講

問 第一講の中に、耶穌教と基督教といふ字が多く用ゐてあるが、何か其間に差違があるであらうか、或は異名同意のものであらうか。

答 斯教は徳川時代に渡來つた時は切支丹と稱へて居つた。それは即ち基督教といふ意味である。單に基督教といふ時は、三位一體の中の第二位に相當する神の子が人となつて、世に降り、三年の間教へを垂れ、終に十字架上に磔刑に處せられた、これ即ち基督である、之を信仰の對象即ち神として崇め、救主として頼る所謂正統派の信者に冠する總稱である。我國では初め耶穌教徒と稱して居つたが、今より二十年程前の教會同盟の會合に於て、爾今我黨は耶穌教といはずして基督教といひ、隨て基督教徒と稱すると云ふことに、定めたの

である。西洋諸國では、多く基督教徒といふ名稱を用ゐて居る。それは天主教、希臘教、新教各派皆其中に含まれてある。耶蘇教といふ時はイエスの教といふことであつて、イエスを信仰の對象として之れを崇拜するではなく、單に理想として模範として其教訓を遵奉するやうな場合に用ゐられてある。然し大體からいへば、或は耶蘇教といひ或は基督教と云ふも、其間に取立てゝいふ程の相違はないといふのが妥當である。

問 徳川氏時代に耶蘇教のことをバテレンといつたさうだが、それはどういふ意味であらうか。

答 バテレンのバテルはバテルの訛であつて、其意味は父である。天主教徒が羅馬法皇をバテル即ち父と尊稱するところから、其歸依者をバテレンと稱へたものである。

問 我國では徳川氏以來今日に至るまで、耶蘇教といへば非忠君、非愛國の群の如く見做されてある。其起源は那邊に存するであらうか。

答 太閤秀吉が宣教師の布教を禁じ、三代將軍徳川家光の時代に和蘭人を除くの外、すべての外國人を追放したことがあるが、是等は基督教自體に非忠君或は非愛國の要素があるといふことを發見した譯ではなく、第一講に縷々陳述したやうに、全く外交問題に關したことである。當時歐羅巴は西班牙大帝國の勃興せる時代であつて、其勢力は遠く東洋の此方比立賓島にまで波及して其勢力範圍に入れられたといふ場合であつたので、一朝軍艦を比立賓から此方へ差向けられた様なことがあつてはとの杞憂と、内は徳川氏の新政府新たに成つて未だ其基礎が鞏固でない時代であり、殊に豊臣氏の遺臣が彼地此地に潜伏して、時期を待て、一旗擧げようとして居る時代であつたので、禍の根を抜くが政治上の最上策と思考して、外國人を追拂ふと共に、基督教の禁令を嚴重にした譯である。和蘭人だけが除外されたのは、當時和蘭は新教國となつて居た爲めに、陰に徳川氏に向て、天主教の害や其禍根の存する所を針小棒大に吹込んだからである。ソコデ自國だけは除外されて、他の國人は皆追放され

た譯である。

問 我國の全部に切支丹邪宗門禁制の高札が掲げてあつたが、之れを撤廢するに至つたのはどういふ譯であるか。

答 それは明治四年に岩倉全權大使が、大久保、木戸等の名士を引率して、歐米諸國を巡訪されたことがある。先づ米國に到着するや、貴國には基督教を邪宗門として禁止されてある。而も其高札が掲げてあるが、それは撤廢されては如何と、到る處基督教代表者若くば個人が同様の事を申込んだので、大使に於ても、基督教國と交際するからには、如斯高札を掲げて置くことは、外交上の障碍であることを認めて、留守居の閣臣に協議して、終に撤廢することになつたと聞及んで居る。

## 第二講

問 哲學者中で、基督教の思想の發達に、最も大なる感化を及した者は何人であ

るか、其名前を承りたい。

答 自分は哲學者でないので、確かに又悉くお答へすることは能きないが、希臘の哲學者中では、第一プラトンを數へなくてはなるまい。中世紀の基督教の思想の發達に就ては、アリストテールを挙げねばならぬ。又近世哲學者では多數あるであらうが、先づカント次にフキヒターといふことには、何人も異論のないことであらう。現時に於ては唯物論の行詰つて居たところに、獨逸のルドルフ・オイケンが出て、靈的生命を標榜して大に理想主義を高調したのと、殆ど時を同ふして、佛蘭西のベルグソンが「創造的進化」といふ一書を公にしたが、後者は神學思想には直接には觸れて居ないやうであるけれども、深くその書の内容を味ひ來る時には、間接に基督教の靈的生命に對して裏書したやうな所もあるのだ、此二者は慥に現代の基督教思想には幾何の援助となつて居ることである。

問 遠き昔の事は聞くに及ばないが、近時基督教に大障礙を與へたのはどうい

ふ思想であるか。

答　それは申すまでもなく、英國ではホーブス、ヒューム等の説であり、佛蘭西ではボルテール、ルソー、ルナン等の唯理論であるが、殊に近時は學問の淵藪といへば獨逸であると思惟されてあつて、多數の學者は杖を獨逸に曳くといふ場合であるので、彼の獨逸のニイチエ、ヘッケル等の議論は慥に基督教傳播の障礙となつて居る。これは他の諸國に對してよりも、内獨逸の思想界には非常な打撃となつて居ることは、今更余輩の喋々を要しないことである。

### 第三講

問　イエス基督を理想とか、模範的人物とか、或は聖人の聖人とさへいつて居るが、我國人は古來印度の釋迦又は支那の孔子を大人格として尊崇し來つた習慣があるので、基督をも其大人格の一人として受け入れるには躊躇しないことであるが、何分基督教では基督を神として之れを崇拜するやうに教ゆる

所から、邦人の多數は之れを信仰するに躊躇して居る次第である。之れに對して貴下の高見を伺ひたい。

答　基督教には宗派が非常に多くある。隨て基督觀に就ても各派其見解を異にして居る。同じ派の中にも各人其意見を異にするやうな譯であつて、千人集まれば千人が意見を異にして居る。天主教又は希臘教の如きは法皇とか、パツリアルクとかいふ大僧正の下に教會の政治は勿論の事、宗教思想をも大に拘束されてあるので、其教徒は皆悉く同一の見解を懷いて居るかといふのに、どうも各人の見解を叩いて見ればさうでもない様である。況や思想の自由を尊重する新教徒に於てをやて、逆も一致を見ることは能きない。大體に於て、基督を神として尊崇する仲間には正統派と稱して、最大多數をなして居る。昔は正統派の思想から少しも異つた思想を有する者はユニテリアンとか、異端者とか稱して、大に排斥する傾向があつたが、今では他人の思想を尊重するといふ所から、異端呼はり跡を絶つ事になつたが、偶には時代後れの宗教

家中にそう云ふ騒を演ずる人もある。隨て基督觀に就ての議論もだんぐり分れてゆく傾向もあるやうだが、然し基督は空前絶後の大人格であつて、釋迦孔子、ソクラテスの如き聖人と同一視する譯にはゆかない。人以上の人格でどちらかといへば神自體を圓滿完全に顯現する所の人格で、神の權化といふがよいと思ふ傾向が盛になつた譯である。邦人が基督を大人格の一人と尊崇することには異論はないが、そこまで尊崇するからには今一步進んで基督を神の權化と認め、更に其背後に天父ある事を認めて、全心全靈を捧げて基督に歸依し、而して基督が天父として崇拜された神を以て、我國民の尊崇すべき信仰の對象と定めた方がよいやうに思ふ。

#### 第四講

問 第四講の中に、「何處へ往くか」といふ問題に就てつまり人間は此世限りでなく、來世があるといふ事を論せられたやうだが、モ少し手短かに靈魂不滅

の證據を擧げて貰ひたい。

答 それは非常な問題であつて、容易なことではない。現世の事でも人をして首肯せしめやうとすれば、余程確實な證據を擧げて來なければ不可能である。況して往た事もなく、見た事もない來世の事だから、到底確實な證據を擧ぐることは能きない。只まあ自分等が平常考へて居る所を、參考になるか、ならぬいかは別問題として、茲に掲げて見よう。

(一)靈魂不滅といふお問ひであるから、貴下の腦中にも靈魂なるものが肉體とは別に存在してあることを認めてあるやうに思ふ。若し頭腦即靈魂でなくして、茲に靈魂といふ精神的な存在があつて、頭腦は靈魂の依て以て働く所の器であるとするならば、丁度人が自動車に乗て疾走するのと同じ事で、自動車が破れて停れば、その利那乗て居る人も止まらねばならぬことになるが、其自動車に役に立たぬと見れば馬車なり腕車なりを賃し以て旅行は續ける事が能きる。よしんば自動車が破壊して仕舞つても、乗手はそれと共に

に破壊さるゝ事なく助かることがある。丁度その如く、頭腦に病氣を發するか又は傷つけば、一時用を爲さないから、靈魂が其用を爲さないやうに見えるが、頭腦が癒れば又其働をなすこととなる。死といふは即ち自働車の破壊と同じく、頭腦の消滅を意味することである。頭腦は消失しても其靈魂は尚ほ存在を續ける事が出来ると思ふても、決して不合理ではない。

(二)人間は衷に植込まれたものが、外部に發現し來るのが常である。古往今來、二三の種族を除くの外、すべての種族は此世限りでなく、來世を望んで居る。假令ば、北氷洋のエスキモーは死んだ後には、より美しき氷の家に住むことを豫期し、亞米利加のインヂアンは死後、より好き狩獵場を得て、多くの獲物を贏ち得るの大快樂があると豫期し、モハメット教徒は現世に於て多妻を許されてある所から、未來に於ては幾十の美人をして思ひのまゝに我側に侍らしむることが出来るかと豫期して居る。又印度人は輪廻と稱して人の魂は種々なる物體に宿り得べきをいひ、支那の聖人は神を祭ること神在す

が如しといひ、又文王陟降して帝の左右にありといふ句もある、是即ち死せる文王は皇天上帝の右左を昇り降りするといふ意に他ならない。我國ては朝廷に於かせられては、皇祖皇宗の靈を祭らせられ、民間に於ては祖先の祭事を大切に營んで居る、これ即ち祖先の靈が死後何處かに存在して居ることを表はして居るのである。基督教に於ては、其舊約の時代には、靈魂不滅の説は充分に發達しては居らなかつたから、人は死すれば祖先の居る所に行く事を信じて居たのである。基督の少し以前からして、靈魂は不滅であることを愈確信することになつて來た。如斯人々が永生を希望する所を見れば、元來人間の靈魂は永存すべく造られたものと見ても、決して不合理ではなからう。

(三)少し理窟を述べて見たいが、世の中で價值のあるものは容易に滅しない。價值のないものは何時の間にか消失することがある。此理法が果して眞なりとすれば、凡そ世の中に靈魂ほど貴いものはない。わけて幾十年の間

苦心慘憺磨きあげられたる魂、即ち成熟したる人格は殆んど價値を定むることの出来ないほど高價なものである。若し天地宇宙に神ありとすれば、如斯磨きあげられたる靈魂を、五十年七十年にして肉體の死と共に消滅させるのは決して聖意ではあるまい。神が存し、靈魂が存するとすれば、どうしても靈魂の不滅を信せずしては居られない。

(四)序手にモーツ理窟をいつて見やう。自分は丁年に達するか、達しない弱年の時に、靈魂は不滅と確信したものである。所が進化論や唯物論の論法に對して其信仰を動かさるゝやうな場合がないではなかつた。一日慙ういふ考へが起つた、靈魂不滅を樂しんで愉快に生活して居ると、涙を流すやうな、身を切らるゝやうな苦痛があつても、それは此世限りである。死すれば永遠神の聖前に、より善き生存を爲し得ると思ふて耐へ忍んで居る。さて死といふものに出會した其の瞬間、靈魂が消ゆるものであるならば、あゝ吾は過てり、永久生を信せずして、肉の生を樂しんで置いた方がよかつたのに

と後悔するやうな暇がないので、寧ろ永生を信じて樂しんだ方が勝ちだと思ふた。幸に先きに論ずる如く、日に月に未來の希望が確かまつて來るので、今いふやうな極端の場合には接しないで済むであらふ。まあ、それ位の事より今申述べることには能きない。

## 第五講

問 正統派の教會に於ては、人の救ひとして、贖罪といふことを最も大切な教理として唱道さるゝと聞くが、一體贖罪とは何を意味するであらうか。

答 贖は、あがなふといふ意味で、人間が何ものかの捕虜となつて居るので、それを基督の死に依てあがなひ出すといふ所から來たのである。

第一、神學者はかく考へた、すべての人類は罪を犯した爲めに皆悉く惡魔の捕虜となつて居る。其の罪人を惡魔の手よりあがなひ出す爲めには何か價を拂はなくてはならぬ。基督は即ち己れの身體を價として、惡魔に拂ひ給ふ

たのである。所が此説を克く考へて見ると、悪魔を大に勢力あるもの即ち神の好敵手と見たのであるから、どうも面白くない。

第二、人は罪を犯してそれが爲めに神の罰を受くべきものとなつて居る。そこで基督は十字架上の死を以て、罪人を悪魔の手よりあがなひ出し給ふたといふことである。これも克く考へて見ると、神が己が子を殺さなければ人の罪を赦すことが能きないといふことになるので、何だかそこに矛盾があるやうである。

第三、そこで恚ういふことを考へた。神の御性格には公義と仁愛の二方面がある。人が罪惡を犯した場合に、仁愛の方面は之れを罰したり又は滅したりするに忍びないので、悔改めさへすれば赦してやろうといふ気分になるものであるが、公義の方面は、人が神の定めを背いて罪を犯すからには、何處までも之れを責罰せずしては赦されない、そこで神の子基督が其二つの性格を調和せしむる爲めに、十字架上に犠牲となられたといふのである。考へたとい

ふ方からいへば、神學者は誠によく考へたものだが、どうも神なるものが、其二つの性質の間に不調和を來して、其調和を計る爲めには、獨生子を殺さなくてはならぬとは、何だか穩當でないやうである。

第四、茲に於て乎、基督の十字架の死は、献身犠牲の生涯の最後の犠牲を意味するものである。基督は世の爲め人の爲めに盡さんと欲して、敢て十字架の死をとられた譯である。其十字架の死は、基督の背後に立ち給ふ神の深い慈愛を表はすものである。其慈愛と共に、神の義をも表して居る。基督を殺したものは、其死に對して實に非常な罪を犯したと思ふ許りてなく、神は基督を以て人間を救はんとし給ひしことを思ふ時は、翻然として悔改めなければならぬことになる。

## 第六講

問 第六講に、祈禱に就ての高説を拜讀したが、其中で神を讚美し、其鴻恩を感謝



するといふ如き實に同感に堪へない。又我身の罪障を悔いて、之れを神前に懺悔するといふのも實に當然だと共鳴する。只茲に理解し兼ねるのは、天地宇宙の神は徹底せる法則を以て、宇宙萬物を支配し給ふことである。人間が祈禱祈願をしたからとて、其天則を變更さるゝことは、よもあるまいと思ふ。祈禱の聞かるゝといふのは何を意味することであらうか。

答 御質問は尤もなることである。屢さういふ質問に接することである。神が人間の祈禱を聴許せんが爲めに天則を變更さるゝことはよもあるまいとお言葉であるが、茲に考へなければならぬとは、吾人人間が天地宇宙間に存する所の天則のすべてを知て居るや否やである。假令ば十二三歳の子供が田舎に埋てゐては、逆も立身出世は出来ないから、どうか都會の學校にやつて貰いたい、子供の知り得る範圍に於ては、逆も父の財力が許しさうにない。子供は熱心の餘り願つたところが父は其の願ひを容れた。何ぞ知らん、父の方には子供の知らない財力があつたのである。斯くの如く神の御手許には

實に測るべからざる所の豊富な資源があること、又吾人が知らない天則の存する事を思ふて、何でも願があれば熱誠を籠めて祈禱することは適當である。殊に祈禱には「聖意にかなはゞ聞あげ給へ」といふのであるから、我意を主張する譯ではない。我等に至誠が存すれば聴いていたゞけることである。

問 基督の名に依つてとはどういふ意味であらうか。

答 それは自分は誠につまなぬものであり、且つ罪惡に染めるものであるからして、天父の聖前に出て祈禱するといふことは畏れ多いので、神の聖子基督のお名前を借りて願ふので、丁度高位高官の人に會ふと思ふ時に、名もない吾が突然行くのも憚多いといふので、其人を知れる有力な人の紹介に依つて面會を遂げるやうなものである。

問 今一つはアーメンとは何の事であらうか。

答 それはヘブライ語で、斯くならしめ給へといふことである。まあいはゞ恐

惶謹言といふ譯で、誠心誠意これは聞上げて貰いたいといふ意に外ならない次第である。

## 第七講

問 第七講に更生と悔改といふ字が多く用ゐられてあるが何處に相違があるか、一讀しただけでは理解が能きないから御説明を願ひたい。

答 悔改の方は、どちらかと言へば末で、更生が本である。悔改は部分的であつて更生は全部的である。假令ば、此處に酒癖のある人がある。何程改めやうと思つても容易に改まらない。何か感ずる所があつて、大に發心して全く禁酒することがある。けれどもそれは酒の一事であつて、他の事には餘り影響しないではないが、其人の全部改善といふ譯にはゆかない。虚言家が虚偽を言はないやうになるとか、疝癖ある人がそれを起さないといふ位のものである。更生の方は今少し深刻なので、深く自己の罪惡なり、惡癖なりを省みて悔

悟する丈けでなく、生の目的を變更することになる。假令ば此世の中は面白く可笑しく暮して、自己の快樂を逞ふすればよいと思つて居たが、それは全然間違ひである。何故に吾は此の世の中に生れ出たかを自覺して、生の目的を貫徹する爲めには、先づ己れを磨かねばならぬ事に着眼し、その己れを磨くといふ所から、積極的方面は理想を高め、思想を潔め、意志を鞏固にし、且つ善行是れ努むるといふことになる。消極的の方では、酒癖なり、疝癖なりすべて生の目的に障礙を與ふるやうなものは悉く之れを打捨てるといふことになる。依て更生は其字の如く、眞から其人が生れ更るといふことである。悔改よりも根本的に改造するといふ意味になつて居る。

問 序手だから今一つ此場合に問ひたい。基督教では洗禮を授けるといふことがあるが、一體洗禮とは何を意味するであらうか、又さういふ形式を是非とらねばならぬ理由は何處に存するであらうか。

答 洗禮とは新約書にはバプテスマと原語のまゝに擧げてある。それは浸む

るとの意である。羅馬書六章の初めにポーロがいつて居る如く古き罪惡に汚れた身を葬むるといふ譯だが、葬るといへば土の中に埋むるといふことになるけれども、さういふ面倒臭い事は出来ないのて其代り總身を水に浸めて古き罪ある身を水葬し、茲に改まつて出て來るといふことになる。馬太傳廿八章の終りの數節を見ると、基督は弟子方に向つて、父と子と聖靈の名に入れてバプテスマを施すと仰せられたが、これは即ち神と合體するといふ神秘的な意味を表して居る、して見ると、洗禮は一面は神と靈的結合を爲し、他面には潔い、義しい、新らしい人間になることを天下に向つて表白することである。そこで基督教會に於ては浸禮を施すのが本意であるけれども、今日では其略式として額に數滴の水を澱ぐことになつて居る。形を以て意を害せずといふので、形式といふ上からいへば充分である。尙ほ基督教會では右の如くして、洗禮を領して初めて會員となることになつて居る。或人が慙ういふやうに尋ねたことを覺えて居る。基督教信者になるのは精神的生活に入ること

だ、何も形式を用ゐる必要がないと、そこで私は、君は人と會つた時に辭儀をするや否やと聞けば、其人は辭儀をすと答へたので、更に其人に向て、心中に人を敬するの意があれば、何も形式上頭を下ぐるに及ばないやうであるが、矢張形を持つて居る吾人、人間は精神の存する所、それを形に表はすのが自然であるから、精神的に神に結合し、基督の教へにあづかる爲めに洗禮の形式を執るといふことは當然ではなからうかといつた所が、客は如何にもと首肯して立去つた。

### 第八講

問 第八講の信徳並行は他語以て之れをいへば言行一致といふの類で、是非斯くあらねばならぬことと思ふ。ところが事實に於ては、どうも思ふ通りに行へず、口が先きに立つて行ひが伴はないやうなことがあつて閉口である。如何にすれば遂行が能きるか、御實驗が承りたいものである。

答 基督教では、信は百行の基なりといふ譯で、兎も角神を天父と信じ、基督を救主と仰ぎ、且つ聖靈の靈力に依て潔められたいと云ふ信念が、衷に燃ゆる事が本である。實際活ける神が隠れたる所までも見通して居らせらるゝばかりか、尙ほ己が心の奥の密かなる思ひを知り給ふとの信念が、一度衷に兆せば、恰も深淵に臨むが如く、薄氷を踏むが如く、神の聖意を我本心の勸むるまゝに服従せんことを期するやうになる。さうなつて來ると、自然行爲が正しくなり、潔くなり、隨て徳行の人となることが能きるやうになる。何程善の行ふべきを知て居ても、たゞ智識だけでは、人をして行はしむる力はない。そこは、どうしても天來の靈能に依て遂行するといふことにならねばならぬ。

## 第九講

問 新約の編纂に就ては、略理解が出來て、誠に幸ひであつたと思ふが、どういふ順序で讀めば最も早く基督教が會得せらるゝてあらうか。

答 基督教は基督なり、耶穌教はイエスなりといふ句があるが、何は兎も角も先づイエス基督の一代を知ると共に、其人格及び言行を知らねばならぬ。それを知るのには、四福音書中の馬可傳を先きに讀むべきである。二度も三度も馬可傳を讀み次に馬太傳中の五章六章七章を反覆精讀なし、それから路加傳の方で第十五章の放蕩息子子の比喩を讀んで、大に味ふ所があれば、基督の生涯の全體及び其教訓と基督の温味がわかる。所が宗教的情操を養はんとするには、それはそれ丈けては物足りない感がするから、それを補ふ爲めには、約翰傳の十四、十五、十六の三章を深く味ふ方がよい。尤も合理的な頭腦を有する人であつて、何か理義の徹底したものを讀みたいといふことであれば、羅馬書を讀むがよい。更に學識の方面に深入して居る人であれば、腓立比書、哥羅西書、以弗所書と約翰傳の一章の初めから十九節までを味讀するがよからう。其他に於ては、研究するに従て質問書を郵送さるゝならば喜んでお答へする考へてある。新約書に就ては種々註釋もあるが、茲には略して置く。